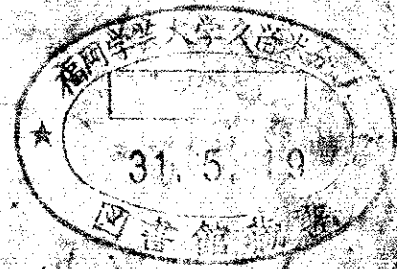


日本略史

四
大
尾



T1A1
26
Ka72

年表掲要

二千二百六十年

關原ノ戰

二千二百六十三年

徳川家康征夷大將軍
ニ任ス

二千二百六十九年

鳴津氏琉球ヲ伐ツ

二千二百七十四年

大坂冬ノ役

二千二百七十五年

大坂夏ノ役

二千二百九十七年

島原ノ役

二千三百十年

由比正堂版ヲ謀ル

二千三百三十一年

伊達氏ノ内訌

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 3 9 1 8 a

福岡教育大学蔵書

二千三百六十一年

赤穂ノ事

魯西亜ノ兵艦蝦夷ニ

寇ス

二十四百九十七年

大鹽平八郎亂ヲ作ス

二千五百十三年

白瑠璃始テ來航ス

二千五百十八年

米英魯蘭佛ト和親ノ

條約ヲ結フ

二千五百二十四年

長州ノ事起ル

二千五百二十七年

王政復古

二千五百二十八年

奥羽ノ役

二千五百二十九年

箱館ノ役

二千五百三十一年

藩ヲ廢シテ縣ヲ置

別田統前
 守利家
 白田源少
 朝三成
 三平老
 下村致部少
 尾生
 三
 駒雅樂頭

日本略史卷之四

笠間益三編輯

二十二年五月十九年巳正月前田利家秀賴ヲ奉
 大坂ニ徙ル徳川家康伏見ニ居リ車ヲ視ル家
 康威権最モ盛ナリ是時ニ當リ天下ノ牧長各自
 立ノ志アリ而シテ大抵皆家康ヲ忌ミ之ヲ除カ
 ント欲ス二月是ヨリ先キ石田三成等相謀リ利
 家家康ヲシテ隙ヲ生セシム三中老等之ヲ和解
 ス利家疾アリ疾ヲ勉メテ伏見ニ赴キ家康ヲ見
 ル家康亦大坂ニ赴キ利家ヲ見ル利家疾甚シキ

ニ至リ家康ニ謂テ曰ク吾且暮將ニ死セントス
願クハ公心ヲ尽シ以テ爾君ヲ輔佐セヨ家康曰
ク諾三成行長等議シテ曰ク家康專横爾君ヲ蔑
視ス速ニ之ヲ除カサル可カラスト如藤清正照
田長政福島正則淺野長政等皆三成ト隙アリ家
康ニ勸メテ三成ヲ誅セント請フ家康許サス乃
チ大坂ニ至リ利家ニ請フ時ニ利家疾篤シ三成
往テ疾ヲ視ル諸將利家ヲ見ルコトヲ得ス既
シテ利家卒ス諸將三成ノ出ルヲ待テ之ヲ要
セント欲ス或ヒト走テ三成ニ告ク毛利淳則

津上杉佐竹等皆三成ト善シ佐竹義宜三成ヲ
テ家康ニ至ラシム家康之ヲ納ル諸將之ヲ聞
憤懣追テ伏見ニ至ル或ヒト家康ニ説キ三成ヲ
除クコト勿ラシム家康大ニ懼ル所アリ諸將
諭シテ兵ヲ罷メシメ又三成ニ諭シテ政ヲ解テ
國ニ就カシム上杉景勝竊カニ三成ト謀ヲ通シ
明歲東西兵ヲ舉ケ以テ家康ヲ討セシコトヲ約
ス六月毛利淳田外征ノ諸將及ヒ前田上杉佐竹
皆國ニ就ク
二千二百六十年 庚子二月家康上杉景勝ヲシテ西

上セシム景勝曰ク吾太閤ノ遺命ニ依リ東邊ヲ
鎮守ス伺ノ内府ノ令ヲ奉セシ家康大ニ怒リ東
上杉氏ヲ伐ニト自カラ諸軍ヲ帥ヒケ東下ス三
成兵ヲ起シテ其後ニ架セント欲ス乃チ大谷吉
隆長東正家増田長盛ト議ヲ定メ檄ヲ遠近ニ移
シテ曰ク徳川内府罪アリ嗣君命シテ之ヲ討セ
シム宜シク速ニ来リテカヲ供ス可シト毛利輝
元以下侯伯來會スル者四十餘人立花宗茂柳川
ニ在リ大坂ノ檄ヲ得ル老臣等議論一ナラス
茂曰ク此間ノ吏三成等ノ姦謀ニ出ルト雖

○
スニ秀頼ノ命ヲ以テ往カシハ是レ豊臣氏
ト絶ツナリ太閤ノ恩誼忘ル可カラスト遂ニ
ヲ率ヒテ大坂ニ赴ク三成等議ヲ決シ軍ヲ副テ
東ス家康ノ將鳥井元忠伏見城ヲ守ル西軍四方
之ヲ攻ム元忠固ク守リ下ラス家康既ニ江戸ヲ
發シ小山野_下ニ至リテ伏見ノ報至ル内外大ニ驚
キ議論紛々井伊直政曰ク徳川氏天下ヲ取ル正
ニ今日ニ在リ宜シク速ニ旃ヲ反シ群雄ヲ掃蕩
ス可シト議乃チ定マル結城秀康ヲ以テ留守セ
シメ景勝ニ備フ秀康出テ宇都宮ニ陣ス家康ハ

海道ヨリ秀忠ハ山道ヨリ道ヲ分ニ而ス海道ノ諸將堀尾忠氏中村一榮池田輝政福島正則等皆城ヲ家康ニ納レ東軍ニ與スルノ意ヲ表ス是ニ於テ海道既ニ通ス而シテ山道未タ通セズ時ニ小早川秀秋伏見ニアリ家康黒田孝高ヲシテ之ヲ諭シ款ヲ送ラレム秀秋之ニ從ヒ竊ニ書ヲ送リテ曰ク東軍ヲ俟チ戈ヲ倒シマニセニト西軍伏見ヲ攻ハル十晝夜元忠善ク拒ク既ニシテ城中内應ヲ為ス者アリ内外圖ヲ合セラ火ヲ城ニ放ツ西軍乘シテ齊ニク攻ム城遂ニ陥リ元忠

井伊直政
本陣也

福島左門大進

毛利
早川秀元

自殺ス八月西軍大舉東ニ下リ美濃ニ入ル大垣城ヲ修メテ以テ根據ノ地トス總勢凡ノ十八騎東軍ノ前軍井伊直政本多忠勝騎卒五万ヲ引テ既ニ清洲ニ至ル大垣ヲ距ル七里相持シテ水々戰ハズ是ヨリ先キ織田秀信西軍ニ與レ岐阜ヲ守ル福島正則等攻メテ之ヲ抜ク大垣ノ西軍岐阜ノ圍ミヲ闢キ出援フ戦利アラズ復退テ大垣ニ入ル小早川秀秋兵ヲ引テ高宮江邊ニ至リ疾ト称シテ前マズ毛利秀元亦美濃ニ入ル其族將秀元ニ勸メテ東軍ニ飯セレム秀元遂ニ東軍ニ

日本書紀 卷之四
通ス京極高次始メ西軍ニ與レ北陸ヲ徇フ是ニ
於テ美濃ニ入ル高次亦心ヲ東軍ニ歸ス大津城
ヲ守リテ西軍ヲ拒カント欲ス故ヲ以テ遲滯敢
テ發セス秀元南宮山濃ニ屯シ秀秋松尾山濃ニ
屯ス東軍敢テ出戰ハス日ニ家康ノ來ルヲ俟ツ
九月家康江戸ヲ發シ鼓行シテ西シ進ンテ岐阜
ニ至ル是時ニ當リ天下ノ兵美濃以東ハ大抵東
軍ニ屬シ以西ハ大抵西軍ニ屬ス豪傑四隅ニ割
據スル者皆成敗ヲ觀望シ大坂ノ諸將戰ヲ議ス
淨田秀家曰ク我守備既ニ具ハル大津ノ兵及ヒ

輝元ノ軍亦將ニ來ラントス敵ノ城トニ致ラ
内外之ヲ擊ハ必勝ノ策ナリ三成曰ク然クス
輩大兵ヲ擁シ關東ヲ伐ツ坐カテ孤城ヲ守リ速
ニ出戰ハスニハ恐ラクハ天下ノ望シラ失ハシ
諸將多ク之ニ從フ終ニ出戰ノ議ヲ決ス夜ル大
坂ヲ發シ小関村濃ニ赴ク秀家及ヒ島津義弘天
滿山濃ニ背テ陣ス小西行長其左ニアリ三成又
其左ニアリ大谷吉隆等其右ニアリ秀秋松尾山
ニ屯ス脇坂安治等其麓ニアリ毛利秀元南宮山
ニ陣ス鍋島勝茂長束正家等其麓ニアリ騎卒凡

心苦、家康、子

十二万八千東軍既ニ西軍ノ出ルヲ知リ家康令
ヲ下シ福島正則ヲ以テ先鋒トシ下野守忠吉及
ヒ井伊直政亦多忠勝之ニ次ク黒田長政加藤嘉
明等右軍タリ藤堂高虎山内一豊等左軍タリ蜂
須賀至鎮等游軍タリ淺野幸長池田輝政等南宮
山ニ備フ家康自ラ中軍タリ騎卒凡七万五千被
明進テ挑配野濃ニ至ル天火ニ霧フリ咫尺辨セ
ス東西ノ軍閑原濃ニ遇フ西軍既ニ東軍ノ近
ヲ見テ誘致シテ之ヲ夾撃ント欲シ未タ敢テ
ヲ挑マス既ニシテ東軍鼓噪大ニ起リ弓銃巴

交ル忠吉直政忠勝等義弘行長ノ陣ヲ撃ツ
等戦太々々秀家進テ正則ヲ撃ツ東軍既易將
ニ退ントス蜂須賀至鎮等游軍ヲ以テ亦リ救
兵ヲ合ヒテ疾撃ツ黒田長政等三成ノ陣ヲ撃ツ
藤堂高虎等大谷吉隆ノ陣ヲ撃ツ東西ノ軍皆健
闘力戦互ニ進ミ互ニ退キ勝敗未タ決セズ秀元
秀秋觀望敵ヲ動カス東軍砲ヲ發シテ以テ之ヲ
裁ム秀秋乃チ兵八千ヲ以テ山ヲ下リ吉隆ノ右
翼ヲ撃ツ此ニ於テ家康令ヲ諸軍ニ傳ヘ鼓譟齊
シク進ム声天地ヲ動ス西軍頗ル擾ル東軍象

秀家ヲ撃テ之ヲ走ラス高虎等既ニ吉隆
ヲ獲タリ進テ長政等ト三成ヲ撃テ之ヲ走ラヌ
行長義弘等皆走ル西軍遂ニ大ニ敗ル東軍勝ニ
乘レ北ルヲ追ヒ斬首四万級三成走リテ伊吹山
江ニ圍ル田中吉政之レヲ捕テ行長等亦捕ヘラ
ル義弘走リテ薩摩ニ帰ル是ヨリ先キ立花宗茂
京極高次ヲ大津ニ攻メ之ヲ下ヌ遂ニ兵ヲ引テ
東草津江ニ至ル関原ノ敗ヲ聞キ還テ京師ニ入
リ木下家定ニ謂テ曰ク貴息ノ事言フ可カラ
子嗣君ヲ右ケント欲セハ請フ共ニ大坂ヲ守ラ

ント貴息ハ秀秋ヲ云家定曰ク了先性ト承
遂ニ大坂ニ至リ輝元ニ謂テ曰ク公城守セシ
欲セハ願クハ一方ヲ扞カン輝元曰ク議シテ後
答ヘン宗茂罵リテ曰ク今日復何ヲ議センマ
將士宗茂ノ勤メテ曰ク公豊臣氏ニ酬ムル既ニ
足レリ東軍ニ降ルニ如カス宗茂乃チ人ヲシテ
降ヲ乞ハシメ自カラ軍ヲ引テ柳川ニ帰ル家康
軍ヲ進メテ草津ニ次ヌ天皇使ヲ遣ハシテ之ヲ
勞ス是ヨリ先キ山道ノ軍進テ上田農ヲ至ル真
田昌幸振守ル東軍圍ミ攻ル旬餘城堅クシテ拔

ケス 秀忠仙石秀父等ヲシテ昌幸ニ倫ハシメ自
カニ國ヲ離ラ西入途ニ捷ヲ報スル使者ニ遇フ
此ニ至リテ草津ニ達ス是ヲ以テ関原ノ軍ニ會
スル能ハス家康秀忠進ンテ大津ニ次ス侯伯將
士來テ家康ヲ見ル者日々相踵ク趨元及ヒ増田
長盛降ヲ乞フ家康答ヘス遂ニ大坂ニ入ル是ヨ
リ先キ大坂関原ノ敗聞ヲ得テ上下色ヲ失フ家
康人ヲシテ秀頼母子ヲ諭ニ安堵故ノ如クナ
シム十月ニ成行長等ヲ六條磧_山ニ斬ル遂ニ
ヲ下シテ西南諸國未タ定マフサル者ヲ伐メ

ム加藤清正黒田孝高西國ヲ討テ前並後悉ク
定マル轉レテ筑後ニ入ル時ニ立花宗茂既ニ東
軍ニ降リ歸リテ柳川ニ在リ鍋島直茂ノ子勝茂
初ニ西軍ニ從フヲ以テ直茂清正孝高ニ惡ニ察
茂ヲ撃テ以テ家康ニ媚ント欲ニ兵ヲ發シテ柳
川ヲ攻ム宗茂怒リ兵ヲ境上ニ出シ之ヲ防ク清
正孝高之ヲ和解ニ宗茂乃チ城ヲ清正ニ致シテ
去ル清正之ヲ敵水ニ遣キ待遇太々厚ニ是月増
田長盛ヲ高野ニ放チ毛利輝元ノ六國ヲ削リ長
防二國ヲ食マシム浮田秀家ノ國ヲ收ム秀家通

レテ西嶋津氏ニ依ル十一月清正等肥筑豊ノ兵
ヲ合セテ南薩摩ニ臨ム嶋津氏響キニ使ヲ遣ハ
シテ降ヲ乞フ清正等乃チ引還ル西國悉ク定マ
ル是ヨリ先キ關原ノ報陸奥ニ至ル上杉景勝大
ニ懼ル佐竹義宣亦懼レテ降ヲ議ス東北亦稍定
マル十二月家康天下ヲ裂テ有功ヲ賞ス關東八
州ヲ以テ根據ノ地トシ江戸城ニ居ルコト故ノ
如シ越前尾張近江伊勢ヲ以テ宗族舊臣ヲ封
其餘盡ク外藩タリ
二千二百六十一年 辛丑 四月家康秀忠ヲシテ伴

關東諸國ヲ平ラシム上杉佐竹皆降ル上杉
封ヲ收メテ米澤三十石ヲ食マシム七日家
板倉勝重ヲ以テ京師所司代トシ訟獄等ノ事
掌ラシム勝重能ク其任ニ勝ヘ物情大ニ定マ
十一月家康江戸ニ歸ル
二千二百六十二年 寅 正月前田利長江戸ニ朝ス
家康之ヲ辭シ避ケテ伏見ニ往ク利長秀忠ヲ見
ル三月家康大阪ニ往キ新正ヲ賀ス五月家康入
朝ス十二月嶋津忠恒伏見ニ至リ家康ヲ見ル是
ヨリ先キ淨田秀家臨レテ薩摩ニアリ家康頗ル

之ヲ覽ル忠恒乃チ家康ニ請フテ其死ヲ宥メシ
ム家康乃チ死一等ヲ減シテ之ヲ八丈嶋伊ニ流
ス是歳佐竹氏ノ封ヲ收メ秋田二十万石ヲ食マ

○
○
二千二百六十三年卯二月詔シテ徳川家康ヲ以
テ征夷大將軍ニ任ス時ニ家康内大臣タリ進テ
右大臣ニ任ス三月西道ノ侯伯盡ク江戸ニ朝ス
四月秀頼内大臣ニ任シ從一位ニ叙ス家康孫
ヲ以テ秀頼ニ妻ハス
二千二百六十四年辰是歳藤堂高虎議ヲ唱ヘ諸

侯ヲシテ家康宗義智ニ謂テ曰ク朝鮮ヲ伐ハ秀吉
意ニシテ我知ル所ニ非ス彼若シ入貢ノ欲セ
我當ニ許ス可シト義智使ヲ遣ハレ朝鮮ニ諭ス
朝鮮之一從ヲ且ツ往リノ傳虜ヲ還サント
請フ此ニ至リテ義智朝鮮ノ使ヲ率ヒテ伏見
ニ見ル諸道ニ令シテ朝鮮ノ傳虜ヲ還サレト
月徳川家康職ヲ辞ス詔ニテ徳川秀忠ヲ以テ征

夷大將軍ニ任シ正二位ニ叙ス
二千二百六十六年丙午九月家康島津忠恒ヲシテ
松平氏ヲ冒サシメ名ヲ家久ト改メシム諸藩多
ク松平氏ヲ冒スハ此ニ始マル
二千二百六十七年丁未正月家康諸侯ニ課シテ駿
府ニ城ク成テ之ニ徙ル五月朝鮮使入貢ス此ヨ
リ將軍禪代コトニ入貢スルヲ以テ例トス
二千二百六十九年酉己是ヨリ先キ島津家久家
ノ命ヲ受ケ琉球ヲ招ク琉球至ラヌ家久請フテ
之ヲ討ス其將新納某ヲシテ八千人ノ帥トシ南

伐ス
至リ尚寧及ヒ至テ擒シ之ニ琉球ヲ定
幕議因テ琉球ヲ以テ島津氏ニ賜フテ其屬隸
ス是ヨリ先キ我高船阿媽港ニ至リ皆談殺セシ
ル其三人地掃ル是歲港人二百肥前長崎ニ至ル
幕府兵ヲ發シ撃テ之ヲ殲ス後三歲ニシテ港人
來謝ス乃チ印信ヲ給レ互市ヲ許ス阿媽港ハ支
山縣ニ是歲和蘭陀始テ通商ス然レ長崎ノ外未
泊ヲ禁ス

二千二百七十年庚戌八月島津家久琉球王尚寧ヲ

携へ來リテ駿府及ヒ江戸ニ至リ右物ヲ獻ス

二千二百七十一年辛三月天皇位ヲ皇太子ニ禪

是百七十一後水尾天皇トス

二千二百七十二年壬九月明人鄭芝龍歸化ス

二千二百七十三年癸是歲江戸及ヒ駿府ニ老中

職ヲ置キ天下ノ政ヲ執ル

二千二百七十四年甲四月内旨ヲ幕府ニ下シ

軍秀忠ノ女ヲ納メニトス幕府命ヲ奉ス是時

當リ秀頼已ニ長ス大野治長寺兵ヲ擧テ以テ

臣氏ノ旧業ヲ復ヒント欲ス秀頼ノ傳治桐且元

常ニ秀頼ヲ戒メテ曰ク君務メテ徳川公ノ驍心

ヲ失ハサルトキハ以テ長久ナル可シ然ラサ

ハ將ニ不測ノ禍アラントスト秀頼頗ル悟ル

臣且元問東ニ私アルカト疑フテ稽之ヲ精防ス

是ヨリ先ニ秀頼方廣寺ヲ造リ又大鏡ヲ鑄ルハ

日秀謀家康ヲ迎ヘテ落成ヲ慶セントス既ニシ

テ鑑録ニ國家安康ノ句アルヲ視テ家康大ニ怒

テ曰ク是我名ヲ切ルナリ秀頼我ヲ誣メント欲

スルヤト且元分解陳謝甚タカハト雖片家康聽

スレテ曰ク何以テ侍トシテ其他ナキヲ表セン

○
ヤ且元窮地恩慮シテ三策ヲ得タリ因テ定策ヲ
納レテ質トセシム欲ス密ニ秀頼ニ奏シテ曰ク
母ヲ徳川氏ニ質スルハ先例ナキニ非ラス是
ヲ上策トスト或ヒト且元君ヲ賣ルト譏ス淀君
大ニ怒リ群臣ト議ヲ決レテ且元ヲ誅セントス
且元其然ニ奔ル遠近駭然十月家康乃チ令ヲ天
下ニ下レテ大坂ヲ攻ム秀頼諸將ヲ會シテ拒牛
ヲ議ス大野治長等檄ヲ四方ニ移ス關原敗後
在ニ伏賜スル者真田幸村後藤基次等及ヒ諸國
亡命ノ徒四方ヨリ群集ス旬日ニシテ五万人ヲ

得タリ然レ有土ノ將士一人モ應ムル者ナレ
田氏以下皆徳川氏ヲ憚リテ使者ヲ縛シテ徳川
氏ニ送ル治長等意頗ル沮ム然レ中コロムハ
ケラス遂ニ大ニ守備ヲ修ム庇桐且元其邑ヨリ
坂浦ニ至ル大坂ノ兵之ヲ路ニ要ス且元逃レテ
京師ニ至ル時ニ家康京師ニアリ且元ヲ召見ル
且元之ヲ辭シテ曰ク臣平和ヲ計ノ乃チ大隙ヲ
生ス何以テ見ルコトヲ為ンヤ十一月家康秀忠
既ニ伏見ニ至リ進ンテ大坂ニ至ル家康佳吉ニ
陣ニ秀忠平野ニ陣ス諸將各所ニ陣レ城ノ四面

ヲ圍ミ尺地ヲ遺サス兵九ノ五十万人大坂亦諸
軍ヲ築キ之ヲ守ル東軍進ニテ諸柵ヲ拔キ漸
ク水城ニ逼ル城將後藤基次真田幸村等善ク戰
フ互ニ勝敗アリ十二月家康人ヲシテ書ヲ城中
ニ贈リ和ヲ議セノト欲ス城中衆議決セス治長
等議ニテ曰ク徳川翁ハ且夕ノ人ナリ且明年東
吉西凶姑ヲク和ヲ約シテ以テ後圖ヲ為サント
乃チ秀頼ニ勸メテ和ヲ請ハシム家康肉テ三事
ヲ要ム曰ク羅城ヲ毀テ周池ヲ填メシ曰ク封ヲ
大和ニ使サン曰ク淀君ヲ以テ質トセン三事必

ス其一ニ居ラント治長秀頼ノ旨ヲ以テ答ヘ
曰ク周池ヲ填メシ然レ諸客兵ノ為メニ食邑ヲ
加ヘヨト家康怒ル和議彼止ム天皇使ヲ遣ハ
詔旨ヲ家康ニ下シ和議ヲ圖ラシム家康乃チ
君ノ妹常光氏ヲ京師ヨリ迎ヘ城ニ入テ和ヲ
メシム淀君乃チ秀頼ニ勸ム此ニ於テ和成ル
シテ周池ヲ填メ客兵ヲ逐フ家康令シテ卒十
人ヲ發シテ外城ヲ毀テ空城ヲ填メシム長夜督
責明春ニ至リテ竣ル
二千二百七十五年乙卯元和ト改元ス正月家康秀

忠皆東ニ帰ル諸國ノ兵盡罷ノ帰ル三月大坂ノ
 客兵交秀頼母子ニ説テ再舉ヲ圖フニコトヲ御
 上乃チ遠近ニ募リテ十二万人ヲ得タリ是ニ於
 テ大ニ戰倫ヲ修ム報關東ニ至ル家康秀忠相議
 シ故ナラニ知ラサル者ノ如クシ以テ大坂ノ動
 静ヲ候フ既ニシテ報復至ル家康乃チ令ヲ諸侯
 ニ下ス皆前役ノ如シ四月東軍ノ先鋒京師ニ至
 ル家康秀忠相繼テ發シ程ヲ兼テ西上ス此ニ
 テ大坂兵ヲ分テ三トシ大野治長治房木村重成
 各一軍ヲ領ス後藤基次真田幸村等分テ之ニ從

ス秀頼自カラ旗鼓ヲ具ハ三軍ノ向テ所ヲ指揮
 ス軍氣頗ル奮フ然レ治長驕傲軍議屢變ス是ヲ
 以テ諸將歎々樂マヌ城中人々相猜防ス家康秀
 忠既ニ京師ニ至リ遂ニ諸軍ノ向テ所ヲ部署ス
 山陽山陰ノ將士神崎ヨリ進ミ南海ノ將士和泉
 ヲリ大和伊勢美濃ノ諸部ハ大和口ヨリ先進ム
 伊達政宗等之カ帥タリ井伊藤堂中軍ノ先鋒々
 リ榊原康勝寺河内口ヨリ進ム五月家康京師ヲ
 發シ秀忠伏見ヲ發シ家康星田内河ニ陣シ秀忠角
 南内河ニ陣ス城中東軍大ニ至ルヲ聞キ乃チ戰ヲ

議ス後藤基次薄田兼相等出テ平野津^撰ニ陣ス治
長幸村重成及ヒ長曾我部盛親相繼テ出ツ基次
夜ニ衆ニ家康ノ將水野勝成ノ陣ヲ襲ハントス
道ヲ失フテ進ムコト執ハス且日片山河ニ至リ
勝成ト遇フ撃テ之ヲ破ル兼相等亦来リ援フ連
戦決ヒス東軍夾ンテ基次ヲ撃ツ基次盡ク其騎
ヲ亡フ勇ヲ奮フテ進ミ戦フ銃ニ中リニ死ス兼
相亦奮戦ンテ死ス幸村等急ヲ聞テ馳ヒ至リ
達氏ノ軍ヲ撃テ之ヲ破ル伊達氏ノ軍騎戦ニ長
ス乃チ馬上銃ヲ發シテ復進ム幸村退走ル盛親

重成等并伊藤堂ノ兵ト戦フテ之ヲ破ル重成捨
ヲ揮フア挺進ス向ノ所皆靡ク而シテ其兵死傷
畧盡ク重成奮進ンテ遂ニ死ス并伊藤堂ノ軍進
ンテ盛親ニ逼ル盛親退去リ幸村等出テ茶臼山
津^撰ニ陣シ森勝長等天王寺津^撰ノ南ニ陣シ治長等
各其近傍ニ陣ス東軍山野ニ充滿シ左右并ニ進
ム幸村治長ニ謂テ曰ク天下ノ事今日ニ決ス互
シク主公ヲシテ出テム可シ乃チ軍氣自カラ
倍セント治長諾シテ城ニ入レハ秀頼己ニ櫻門
ニ在リ將ニ出ントス既ニシテ或ヒト城中内應

ヲナス者アリト告ク治長懼テ秀頼ヲ止メ東軍
尤先鋒已ニ未逼ル森永銃ヲ以テ戰ヲ挑ム東
軍少シク退ク幸村衆シテ進ミ縦横血戰東軍本
多成重本多忠朝等奮撃テ終ニ幸村ヲ獲ル東軍
右先鋒大野治房ノ陣ニ逼ル治房拒キ戰フ互ニ
勝敗アリ森勝永直ニ家康ノ營ニ還ル藤堂氏撃
テ之ヲ却ク治房亦敗レテ城ニ入ル時ニ兩軍戰
方ニ酣ニシテ埃塵大ニ起リ彼此紛雜辨スハ
ラス家康僕人ヲシテ城ニ入り知ヲ議セシム
君乃チ秀頼ヲシテ治長等ヲ召還サシム治長

ヲ反シテ城ニ入ル諸軍遂ニ大ニ驚ク以テ為テ
ケ城中變アリト東軍之ニ報シテ大ニ進ム城兵
大ニ潰ル東軍賊謀シテ城ニ逼ル既ニシテ城中
内應ヲ為ス者アリ東軍遂ニ城ニ入ル火ヲ放テ
諸樓櫓ヲ燒ク終ニ天主閣ニ及フ東軍諸門ヲ破
リテ入ル秀頼火ヲ觀月樓ニ避ク既ニシテ火樓
ニ及フ治長秀頼及ヒ淀君ヲ備倉中ニ徙シ夫入
徳川氏ヲ護送シテ東軍ニ至ラシム家康并伊直
孝安藤重信等ヲ遣ハシテ備倉ヲ守ラシム家康
人ヲ遣ハシ秀頼母子ニ謂テ曰ク太閤ノ旧好吾

豈忘レシマ苟クモ母子皆出テハ秀頼ヲ高野ニ
 置キ淀君ニ給スルニ万石ヲ以テセント治長入
 テ告ケ答ハテ曰ク謹テ命ノ辱キヲ拜ス當ニ往
 テ之ヲ謝ス可シ然レ萬兵充塞願クハニ興ヲ得
 テ往カント往後未タ決セス直孝等銃ヲ倉中ニ
 發シ以テ絶ヲ示ス秀頼懐然トシテ曰ク吾太閤
 ノ嫡子ニシテ此ニ至ルハ命ナリト自刃シテ薨
 流君人ヲシテ巳ヲ殺サシム治長以下二十餘
 人皆之ヲ殉ス家康進ニテ櫻門ニ至ル直孝等
 皆狀ヲ報ス家康之ヲ領ツク即日京師ニ歸ル

日秀忠代見、婦ハ八月家康駿府ニ帰リ秀忠江
 戸ニ歸ル是冬天ト悉ク平クヲ以テ九歳七歳一
 令シテ諸國皆ヲ毀タシム
 二十二年七月十六年^{丙辰}三月家康疾アリ執シテ本
 政大臣ニ任ヌ四月家康疾篤シ秀忠ニ遺訓シ疾
 革ナルニ及ンテ秀忠ヲ顧ミテ曰ク汝天下ヲ何
 ント思フマ秀忠答ハテ曰ク將ニ大ニ亂レト
 ハ家康曰ク善レ嫡孫家光ヲ召テ曰ク汝他日天
 下ヲ治ムル者ナリ天下ヲ治ムルノ道ハ慈ニ在
 リト乃チ薨ス

二千二百七十七年 丁巳八月 後陽成上皇崩。是歲

朝鮮未聘ス

二千二百七十九年 己未月 福島正則ノ封ヲ奪フ

テ之ヲ津輕ニ流ス初 正則功ヲ恃ンテ驕傲太

殺戮ヲ好ム百姓大ニ苦レム是ニ於テ秀忠并

伊直孝ト策ヲ決シ人ヲ遣ハシ正則ノ邸ニ就キ

命ヲ傳ヘ其封安藝倫絲ヲ收メテ之ヲ津輕ニ放

ツ正則命フ聞テ曰ク前將軍ヲシテ在ラシメハ

吾將ニ一言セントス今復何ヲ言ハンカヲ命

奉ス後之ヲ信濃ニ移ス七月京師所司代板倉勝

重職ヲ辭ス其子重宗代リ任ス

二千二百八十年 庚申六月 將軍秀忠ノ女和子ヲ以

テ女御ニ拜ス後ヲ中宮トナル

二千二百八十三年 癸亥六月 德川秀忠職ヲ辭ス七

月 德川家光ヲ以テ征夷大將軍ニ任ス

二千二百八十四年 甲寬永ト政元ス十二月朝鮮

來聘ス

二千二百八十六年 丙申八月 前將軍秀忠將軍家光

共ニ京師ニ朝ス詔シテ秀忠ヲ以テ太政大臣ニ

任ス十月 秀忠家光皆東ニ歸ル

日本
二千二百八十九年 巳十一月 天皇位 皇子内親
王ニ禪ル是ヲ明正天皇トス實ニ中宮徳川氏ノ
出ナリ

二千二百九十年 庚六月 琉球幕府ニ貢ス

二千二百九十二年 壬正月 前將軍徳川秀忠薨ス

秀忠既ニ薨ス將軍家光令ヲ下シ盡ク諸侯伯ヲ

召シ謂テ曰ク前將軍忠ス諸君或ハ天下ヲ冀望

セハ唯諸君ノ欲スル所ノマ、ノリ然ル家光既

ニ軍職ヲ帶フ當ニ弓箭ヲ以テ之ヲ授發ス可シ

ト諸侯愕然未ニ答ヘス伊達政宗進ニテ曰ク執

カ徳川氏ノ澤ヲ蒙ラリラシ今日異心ノ扶サム
者アラハ政宗請フ先ツ往テ之ヲ伐ニ衆同聲答
ヘテ曰ク皆政宗ノ言ノ如シト乃チ退ク此ヨリ

徳川氏ノ威權益定マル

二千二百九十四年 甲六月 將軍京師ニ朝ス八月

江戸ニ歸ル

二千二百九十六年 丙七月 朝鮮未聘ス

二千二百九十七年 丁八月 小而行長等遣臣而陸

ニ伏匿スル者天主教ヲ以テ廢民ヲ煽動シ諸古

ニ移據シ衆ヲ聚メテ肥前高原ニ據ル總勢四万

餘人天草肥後人益田四郎トル者其巨魁タリ十一月幕府命ヲ西海諸藩ニ下シテ賊ヲ討ヒシム振倉重昌ヲ遣ハシテ軍ヲ督セシム島津細川細川綱島有馬立花寺澤高家兵ヲ發シテ島原城ヲ圍ミ之ヲ攻ム賊敗テ山ヲ戰ハス諸軍乃チ長圍ノ策ヲ為ス重昌諸將ノ會シテ曰ク吾日ヲ曠フレ文ヲ持セハ恐ラク近國ノ愚民相率ヒテ賊ニ應ムルニ至ラシ亘ニク賊ヲ挑ミ誘キ出シテ以テ戰ヲ決スヘシト乃チ夜ニ乘リ喊声ヲ發シテ以テ賊ノ動靜ヲ試ム賊敗テ出ス重昌乃チ令

シテ鍋島氏立花氏アリノ東西差一攻レム鍋島西面ヨリ進ム賊ノ銃丸雨ノ如ク下ル鍋島氏利アラシキテ退ク立花氏東面ヲ攻ム賊又矢石ヲ發シテ力拒ク立花氏ノ兵勇ヲ奮テ苦戰僵屍相枕ス重昌命シテ兵ヲ斂メシム乃チ令シテ曰ク此賊急ニ拔ル易カラズ之ヲ急ニスレハ多ク兵ヲ領セント諸軍ヲシテ後令ヲ待タシム將軍賊勢猖獗ナルヲ聞キ細カラ之ヲ征セント欲ス執政之ヲ諫止ス乃チ松平信綱ニ命シテ赴カシム重昌之ヲ聞テ曰ク吾等急ニ戰ハサルハ賊ヲ

疲ラスノ筈ナリ今信綱等來リ討ス吾急ニ城ヲ
取ラスニハ何ノ面目アリテ信綱等ヲ見ニヤト
二千二百九十八年戊寅正月元日天未夕曉ス有馬
氏及ヒ松倉重次時ニ原進ニ攻ム皆敗走ス諸
軍繼テ進ム賊弓銃亂發矢丸雨注諸軍進ムコト
能ハス重昌乃チ馬ヲ下リ槍ヲ提ケテ進ニ以テ
諸軍ヲ勦マズ諸軍應ヒス重昌獨リ手兵ヲ帥ヒ
馳テ踰テ登ル矢丸益急ナリ重昌、皆碎ケ捨拍レ
遂ニ丸ニ中リテ死ス重昌死後三日信綱島原ニ
達ス信綱亦長圍ノ策ヲ為ス二月城中糧乏シク

賊頗ル苦シハ一夜賊三十餘出テ鍋島寺澤黒田三
氏ノ營ヲ斫ル三氏ノ兵拒キ戰フ賊遂ニ敗走ス
數日ニシテ賊益困ニシ諸軍齊ニシテ進ニ攻ム城
終ニ陷イル細川立花ノ兵先登ス細川氏ノ兵四
廓ヲ斬ル賊男女三万人屠戮潰類ナシ諸軍死
ス者一千一百餘ト云之
二千二百九十九年己卯二月和蘭陀未聘ス十一月
英吉利人ノ長崎ニ在ル者ヲ逐フ是ヨリ先キ英
人互市ヲ乞フ幕府許シテ長崎ニ居ラシム此ニ
至リテ其耶蘇教ヲ唱フルヲ聞キ之ヲ逐フ

二十三年

癸未

六月朝拜未聘

十月天皇位ヲ

皇太弟禪心是ヲ後光明天皇トス

二十三年甲申正保改元六月島津光久琉

球ノ使者ヲ以テ幕府ニ朝ス是ヨリ先キ光久ノ

父家父幕府ニ請フテ琉球ヲ征レテ之ヲ定ム幕

府因テ島津氏ニ命シテ之ヲ管轄セシム時ニ其

王尚寧家父ニ從テ駿府及ヒ江戸ニ貢獻ス其後

尚豐尚賢相繼テ立テ是ニ至ツテ尚賢使ヲ遣ハ

シテ幕府ニ朝ス是ヲ琉球國使江戸ニ聘スルノ

始トス

二十三年八月月明燭輝化人

為ニ書ヲ幕府ニヒリテ援兵ヲ乞フ幕府應セシ

是ヨリ先キ芝龍明ニ歸リ功ヲ以テ鄭南安伯

トナル是歲明主清兵ノ執ル所トナル芝龍弟

馮達等ト議シテ太祖ノ裔孫聿劍ヲ立テ主ト

シ以テ恢復ヲ圖ル初メ芝龍ノ長崎ニ在ルヤ長

崎人ヲ娶リ一男ヲ生ム是ニ至リテ長崎ニ請フ

テ之ヲ召レ還ス時ニ年二十三聿劍之ニ姓名ヲ

朱成功ト賜フ其水姓鄭ナルヲ以テ又鄭成功ト

稱ス即チ國姓爺是ナリ

二千三百九年巳九月琉球使ヲ遣ハレ幕府ニ貢
獻ス

二十三年寅四月乙夷大將軍德川家光薨ス

子家細繼ク尋テ征夷上將軍ニ任ス七月江戸ニ

刺客由比正靈ナル者アリ致逆ヲ謀リ其黨九橋

忠弥等ヲレテ深川或ハニ居ラシメ又其黨ヲ大

坂ニ至ラシメ自カヲ跡河府中ニ起キ持リニ東

西並ヒ起ラントス既ニレテ事覺ハハ幕府史ヲ

遣ハレテ忠弥及ヒ大坂ノ黨ヲ囚ヘシメ別ニ史

ヲ駿府ニ遣ハシ城代人久保氏ト俱ニ正靈ノ所

在ヲ圍マシハ正靈事ノ成リヲ知リ第其及ヒ

黨共十餘人ト俱ニ自殺ス十一月忠弥等三十餘

人ヲ品川ニ磔ス是ニ於テ賊悉ク亡ク

二千三百十二年壬兼ト改元ス

二千三百十三年巳九月琉球王子来リ幕府ニ獻

ス

二千三百十四年甲九月壬天皇崩ス手至天皇如ヨリ英

敏學ヲ好ム屢儒士ヲテ書ヲ講セシム世号レ

テ聖天子トス初ノ持持ノ喪ニ始メテ火葬ヲ行

ヒシヨリ累世相受ケ能ク之ヲ改ムルコトナシ

帝常ニ之ヲ歎ニ埋葬ノ曰或ヲ復セント欲ス未
々詔ヲ發セシテ崩ニ魚片其ナル者アリ帝ノ
崩スルヲ聞キ大ニ哭ニテ曰ク噫聖天子何ソ毒
ヲ延ハテ以テ其欲ス一所ヲ行ハサルヤ朝議曰
典ニ依リテ火葬ヲ用ヘント欲ス某奔走シテ接
關家ニ請リ火葬ヲ廢テ以テ帝ノ意ニ從ハシ
ト請フ^御^奏シテ曰クサレ聴カレヌンハ賤臣唯
死アランノミト朝議其忠ヲ感シテ其言ヲ用フ
是ヨリ遂ニ埋葬ノ典ニ復スルニ至ル十一月皇
太弟立ニ是ヲ後西院天皇トス是歲京師所司代

カニ
カニ
カニ

板倉重宗^職ラ、重宗職ニ在ル四十年存リニ治
績ヲ顯ハス世或ハ以テ^傳父ニ賢レリトス
二十三年十五年^本明曆ト改元ス十月朝鮮使ヲ
遣ハシ幕府ニ獻ス
二十三年十七年酉正月江戸大火牙城ヲ延焼ス
三晝夜ニシテ始メテ滅ス都下蕩然曠野トナル
民焚死スル者十万余人餘人は炭林信勝卒ス信
勝ハ京師四條ノ人幼ニシテ穎悟人稱シテ神童
トス長ハルニ及ンテ業ヲ藤原肅ニ受ク後テ幕
府ノ儒臣トナル始メ羅山ト号ス後テ難髪シテ

道春ト稱ス子孫相受ケ儒ヲ以テ幕府ニ仕ラ
二千三百十八年戊萬治ト改元ス六月明ノ大将
鄭成功使ヲ遣ハン方也ヲ幕府ニ獻シ援兵ヲ乞
フ幕府答ヘス

二千三百十九年癸二月明儒朱之瑜歸化シ長崎
ニ至ル之瑜字魯璋號ト号ス是ヨリ先キ之瑜
水邦ニ来ルコト前後三次我援兵ヲ得テ以テ明
室ヲ興復セント欲ス遂ニ志ヲ得ヌ明亡ラルニ
及ンテ清ノ粟ヲ食フヲ恥テ遂ニ本邦ニ投シ復
歸ラス此ノ時ニ當リ徳川光國多ク文學ノ士ヲ

招致ス候ノ之瑜モ亦其時ニ應ニ水戸ニ至ル光
國待ツニ賓師ノ禮ヲ以テス然レテ之瑜國誓未
タ復セサルヲ以テ怒トス言之ニ及ハハ切齒流
涕セサルコトヲレ後江戸ノ水戸邸ニ卒ス
二千三百二十一年辛寅文ト改元ス
二千三百二十三年卯辰月天皇位ヲ皇太弟ニ讓
ル是ヲ靈元天皇トス
二千三百三十年庚十月初メ蝦夷ニ釋仙ナル者
アリ勇カ絶倫諸島ヲ抄奪シ衆夷畏服ス遂ニ松
前僭セントコトヲ謀ル松前之ヲ知ル此ニ至テ

請テ兵ヲ發シ之ヲ討ス幕府六吏ヲ遣ハンテ
 之ヲ殺シ釋仙兵ヲ遣ハン拒キ戰フテ敗走ス釋
 仙大ニ懼、遂ニ出降ル
 二十三年三十一一年^辛四月幕府一ハ關伊達宗勝
 ノ封ヲ奪ヒ之ヲ七化ニ流ス宗勝ハ政宗ノ季子
 ナリハト為リ貧慾ニシテ常ニ宗藩仙臺ヲ覬覦
 ス兄忠宗卒スルニ及ンテ子綱宗綱ク綱宗江戸
 邸中ニアリ宗勝原田直則等ト謀リ綱宗ヲ誘テ
 酒色ニ耽ラシメ遂ニ其過失ヲ舉フ之ヲ幽レ綱
 宗ノ子綱基ヲ立テ自カラ之ヲ輔佐ス是ニ於テ

推テ專ラニシ勢ヲ擅マ、ニシ遂ニ綱基ヲ除カ
 シコトヲ謀ル直則之ヲ謀主タリ是ヨリ先キ國
 老伊達宗重仙臺ニアリ宗勝カ異圖アルヲ知ル
 因テ其妹淺岡ヲ以テ女ハトシ松前重光ヲ以テ
 近侍トシ以テ不虞ニ備ヘシム宗勝毒ヲ餐中ニ
 置キ綱基ニ勸ム淺岡心切ク庵人ヲシテ之ヲ嘗
 シシム庵人即チ斃ル宗勝自カラ安セス其黨ヲ
 シテ夜ル綱基ノ寢室ニ入り之ヲ刺サシム重光
 ノ獲捕スル所トナル是ニ於テ邸内物々タリ宗
 重之ヲ聞キ後車ヲ國者庄倉小十郎ニ託シ馳セ

テ江戸ニ赴キ宗勝及ヒ原田等ノ姦謀ヲ訴フ。聞
 老坂倉重矩宗重ヲ召シテ詰問ス。宗重、辞理明瞭
 應答流ル、ト如シ。因テ復大老酒井忠清ヲ呼ニ
 會シ、宗重及ヒ直則ヲ召シテ對辨セシム。議論數
 次ニシテ直則理屈シ辭盡ル。二人既ニ退ク。俄カ
 ニ直則ヲ殺テ重ヲ斫リ殺ス。右警キ
 起テ直則ヲ撃テ之ヲ殺ス。此ニ於テ宗勝罪斬ニ
 當ル。死一等ヲ減シテ土佐ニ流ス。餘黨數十人ヲ
 仙臺ニ刑入シ。七月琉球王尚貞使ヲ遣ハシ幕府ニ

二千三百三十三年 癸丑 延寶ト改元ス。三月英人長

崎ニ來リ互市ヲ請フ時ニ蘭人亦來聘ス。幕府問
 フニ英人ノ意如何ヲ以テス。蘭人答フルニ其意
 信ス可カラサルヲ以テハ幕府乃チ之ヲ却ク

二千三百四十年 庚申 五月 征夷大將軍徳川家綱薨
 ス。弟綱吉嗣ク。七月 征夷大將軍ニ任ス。八月 後水
 尾法皇崩ス。公孫

二千三百四十一年 辛酉 天和ト改元ス

二千三百四十二年 壬戌 四月 琉球王尚貞使ヲ遣ハ
 シ幕府ニ獻ス。五月 備前少將池田光政卒ス。光政

昨英明儒學ヲ好ム熱澤了公ニ任用シ國內多ク
 學校ヲ設ケ士民ヲ教育ハ海裡ヲ毀テ正祠ヲ修
 ム是ヲ以テ國中皆儒ヲ尊ヒ佛ヲ賤シム佛徒往
 ヲ髮ヲ蓄ヘ還俗スルニ至ル隣國称シテ聖人ノ
 政治トス光政嘗テ烈宰ニ謂テ曰ク苟クモ寡人
 ノ過失ヲ見ハ直諫憚ルコト勿レ汝等モ亦諫ム
 ル者アラハ之ヲ拒クコト勿レト是ニ於テ大臣
 感服シ教化大ニ國內ニ布ハル此ニ至テ卒ハ八
 月朝鮮使ヲ遣ハシ幕府ニ獻ス
 三千三百四十四年甲貞享ト改元ス

二千三百四十五年丙申二月丙申後西院上皇崩丙申
 阿媽港ノ人長崎ニ來リ我漂民ト二人ヲ送還ス
 長崎奉行阿媽港ノ人ヲ雷メテ幕府ニ報ス七月
 幕府長崎奉行アレテ阿媽港ノ人ニ諭シテ曰ク
 昔レヨリ嚴ニ通信ナシト特ニ我漂民ヲ送ルヲ
 以テ汝ヲ放チ還ラシム他日漂民アルニ之ヲ送
 還スコト勿レ
 二千三百四十六年丙申八月朝鮮通商ノ法ヲ定メ
 一歳金一萬八十兩ヲ以テ限トス十二月琉球通
 商ノ法ヲ定メ一歳金八十兩ヲ以テ限トス是歳

注

力都川以西ノ下總ノ地ヲ割テ武藏ニ屬ス

二十三年四十七年卯二月天皇位ヲ皇太子ニ禪

レ是ヲ東山天皇トス

二十三年四十八年戌ニ採ト改元ス四月是ヨリ

北々支那船ノ長崎ニ入ル未夕曾テ其歳欲テ定

メ是ニ至リ幕府始ニ之ヲ定メテ七十艘ヲ以

テ限トス後テ増ヒテ八十艘トス

二十三年五十一年辛未正月神田ノ學校成ル聖堂

ト称ス大將軍孔廟ノ額ヲ書レテ大成殿ト云材

信篤命ニテ髪ヲ蓄ヘシム奏テ請メテ大聖堂

ニ任ス室町氏ノ時ヨリ文教衰替レ外國習後ノ

書及ヒ經筵ニ陪スル等ノ事毎ニ僧徒ヲレテ之

ヲ掌ラレム是ヨリ儒者皆之ニ倣ヒ髪ヲ剃リ僧

衣ヲ披ル是ニ至テ其弊ヲ改ム是歲熊澤了少歿

ス了少ハ京師ノ人蕃山ト号ス中江藤樹ニ從テ

學フ後テ池田光政ニ仕ヘ政ヲ執ルコト十四年

治績大ニ顯ル

二十三年五十六年丙子十一月朔正上皇崩ス享

二十三年五十八年寅將軍綱吉抑澤保明ヲ以テ

老中トシテ奏請フテ右近衛少將ニ任ス保明秘メ

老中トシテ奏請フテ右近衛少將ニ任ス保明秘メ

老中トシテ奏請フテ右近衛少將ニ任ス保明秘メ

老中トシテ奏請フテ右近衛少將ニ任ス保明秘メ

老中トシテ奏請フテ右近衛少將ニ任ス保明秘メ

側レ皇マリテ綱吉ノ寵ヲ受ケ重封ヲ賜フ此ニ至テ政柄ヲ握リ勢内外ヲ傾ク尋テ綱吉偏名ヲ賜フテ吉保ト改メ松平氏ヲ冒サレム

二千三百六十年庚子十二月水戸中納言源光國薨ス私ニ義公ト謚ス光國幼ヨリ英明學ヲ嗜ミ義ヲ好ム嘗テ舊史ノ闕ナラ概キ諸儒ヲ延キ共ニ

大日本史ヲ著ス其他著書頗多ト云フ

二千三百六十一年辛丑三月勅使幕府ニ下ル幕府

之ヲ城中ニ齎ス淺野長矩吉良義英ト私聞レ義

英ヲ傷ツク即日長矩ニ死ヲ賜ヒ赤穂五万石ヲ

没ス初メ勅使ノ江戸ニ至ルマ將軍細野長矩及

ヒ伊達宗春ヲシテ事ヲ掌ラレム義英亦預カル

義英昔宿事ニ習フヲ以テ勅使ノ至ル毎ニ必ス

接待ス此ニ由テ意頗驕傲ナリ事ヲ共ニスル者

旧儀ヲ詢ハント欲スル時ハ必ス皆賄賂ヲ行フ

長矩モ亦義英ニ贈モノシテ以テ其指揮ヲ受ケ

ント欲ス家臣等曰ク此高家ノ職ナリ何ゾ必ス

贈遺ヒント長矩乃チ義英ニ就テ旧儀ヲ詢フ義

英指授甚々疎ナリ長矩之ヲ却ム是日ニ至テ長

矩等城中ニ會シテ事ヲ議ス長矩再々ヒ義英ニ

詢ニ曰儀ヲ以テ義英之ヲ罵辱シ同列ニ諾
 テ曰彼典故ヲ知ラズ何ヲ以テ大賢ニ接ヒン
 ヤ長矩忿怒ヲ技テ義英ノ頭ニ撃ツ流血淋漓
 義英手ヲ以テ面ヲ掩ヒテ俯伏ス長矩再々ヒ其
 肩ヲ撃ツ掘川某長矩ヲ抱ク衆義英ヲ扶テ避ケ
 去ラシハ綱吉之ヲ聞ク大ニ怒リ即日長矩ニ死
 ヲ賜フ數日ニシテ急報赤穗ニ至ル老臣大石良
 雄大野九郎兵衛輝臣ヲ城中ニ會ス會スル者三
 百人良雄曰々主辱ラレ臣死ス此誠ニ吾輩節ニ
 死スルハ死ニシテ然レ死ハ難クニ非ラズ死ハ

スル賈ニ勤ニ諸君以テ如何ント衆皆曰ク城ヲ
 抗ニシテ死センノミ良雄曰ク諸君ノ言固ヨリ
 然リ但人臣ノ義自カラ國家ニ効不可キアラハ
 當ニカヲ盡ス可シ今社稷亡フト雖此大賢君ノ
 以テ先祀ヲ奉ス可キアリ吾等臣シク死ヲ以テ
 幕府ニ請ヒ先君ノ為メニ後ヲ立ツ可シ若シ幕
 府聽カスシハ則チ一死アルノミト九郎兵衛異
 議アリ良雄乃チ原元等ト計ヲ定メ使者ヲ發
 シテ江戸ニ赴カシメ衆ヲ會シテ守城ヲ議ス會
 スル者僅カニ五十餘人良雄曰ク衆離散此ノ如

シ何以テ城ヲ守ラン公使ノ至ルヲ待テ相譽ニ
城中ニ自殺ス可シト旣ニシテ使者ハトニ達シ
幕府ニ後ヲ立テシコトヲ請ハント長矩ノ外
親戸田氏定之ヲ止ム使者還リ報ス良雄同志ト
議シテ曰ク事旣ニ此ニ至リ徒死スルモ益ナシ
ト乃チ復讐ノ議ヲ定メ城ヲ輸シテ去ル初メ良
雄長矩ニ疎斥セラレ國事ニ預ルコト鮮シ人皆
以テ疑漢トス此ニ至テ藩籟擾人々措ク所ヲ
知ラズ良雄之ニ處スル秩然毅レズ衆人始テ服

二千三百六十二年十二月大石良雄歿父子
以下同志四十七人夜ル吉良氏ノ邸ヲ襲ヒ義英
ヲ獲タリ殺其義英ナレバ織ルコトナシ乃チ英
屍ヲ驗スルニ肩ニ刀痕ヲ見ル皆喜テ曰ク是先
弟ノ手撃スル所ニ非ズヤ良雄命ニ之ヲ劊キ
リ以テ長矩ノ墓ヲ祭ル同志吉田兼亮等ヲシテ
官ニ詠ヘ實ヲ告ケシム老中阿部正武衆ニ謂テ
曰ク今世此ノ如キ節義ノ士ヲ得ル誠ニ盛事ト
云フ可シ是日良雄以下四十六人ヲ細川氏等四
家ニ分拘ス

二千三百六十三年 癸酉二月吉良義英ノ子義隆ヲ
信濃ニ放チ其邑ヲ收メ其邸ヲ毀シ父ノ難ニ死
セサルヲ罰スルナリ是月大石良雄以下四十六
人ニ死シ賜フ是ヨリ先キ幕府良雄等ノ罪ヲ議
ス林信篤議ニ曰ク良雄等讐ヲ復スルハ天下
大義ナリ且ツ其舉動詳慎ニシテ上ヲ敬スル
道ヲ得タリ宜シク之ヲ宥シテ以テ人臣ヲ冀
勵ス可ク執政之ヲ然リトス救生茂卿之ヲ聞キ
柳澤吉保ニ謂テ曰ク秋氏ノ議理ナキニ非ス然
ル赤少時宜ニ達セサルニ似タリ今良雄等ヲ宥

サハ恐ニクハ上杉淺野ノ兩家難ヲ掃クニ至ラ
ニ若シ然ラハ是四十余人ヲ宥シテ以テ天下ノ
禍ヲ招クナリ之ヲ殺スニ如カス吉保之ヲ然リ
トハ議乃チ決ス上杉氏ハ吉良氏ノ親姻ナリ
二千三百六十四年 甲戌 永ト改元ス
二千三百六十九年 卯 正月大將軍徳川綱吉薨ス
世尊家宣嗣ク柳澤吉保請テ曰ク臣故將軍ノ殊
遇ヲ受ク宜シク身ヲ以テ殉ス可シ然レ國ニ大
禁アリ願クハ髪ヲ剃テ以テ之ニ報セン家宣曰
ク卿ノ言是ナリ然レ祖宗以來未々執政ニシテ

髪ヲ剃スルヲ聞カス當ニ恭事畢ルヲ待テ仕コ
致シ髪ヲ剃ス可シト聞者其善ク權臣ヲ駕取ス
ルニ服ヲ殺生ヲ除キ狗麤ヲ毀テ之ヲ放ツ府下
感悅ス五月家宣征夷大將軍ニ任ス柳澤吉保仕
ヲ致シ髪ヲ剃ル六月天竺僧ヲ皇太子ニ禪心太
子立ツ是ヨ中御門天皇トス
二千三百七十年庚十一月琉球使ヲ遣ハシテ幕
府ニ獻ス
二千三百七十一年辛酉正徳ト改元ス十一月朝鮮
來聘ハ幕府款井君美ヲシテ之ニ應接セシム

ノ家宣ノ藩邸ニアル君美ヲ寵シ口頭問候
ノ此ニ至テ春遇益渥シ君美才氣超遺博識雄辯
家宣諮詢スル毎ニ古今ヲ援引レ以テ對テ朝鮮
來聘スルニ及テ家宣君美ニ命シテ應接セシム
其應接スルニ玄冠辨袖劍ヲ懸シテ禮文ヲ争フ
侯者趙大億大ニ君美ノ人ト為リテ歎賞シ詩ヲ
作テ之ニ贈ルト云フ
二千三百七十二年壬戌七月大將軍徳川家宣薨ス
世子家繼立ツ尋テ征夷大將軍ニ任ス時ニ甫ヲ
四歳

四年甲申十二月琉球使ヲ遣ハシテ

幕府一廢ス

二千三百七十六年丙戌保ト改元ス四月大將軍

徳川家繼薨ス紀伊中納言徳川吉宗入テ繼ク尋

テ征夷大將軍ニ任ス

二千三百七十八年戊子一月琉球使ヲ遣ハシテ

幕府一廢ス

二千三百七十九年己丑十月朝鮮使ヲ遣ハシテ幕

府ノ繼世ヲ賀ス

二千三百九十二年壬子八月百五十九元法百五十九

二千三百九十三年癸丑西南諸道大ニ飢ニ死スル

者十七万人

二千三百九十五年乙卯三月百五十九天皇位ヲ皇太子ニ禪

ト皇太子立百五十九是ヲ櫻町天皇トス

二千三百九十六年丙辰百五十九文ト改元ス

二千三百九十七年丁巳四月百五十九御門上皇薨ス百五十九

二千四百一年百五十九寛保ト改元ス

二千四百四年百五十九延享ト改元ス

二千四百五年乙丑九月將軍吉宗職ヲ辭ス世子家

重嗣ヲ尋テ征夷大將軍ニ任ス

百五十九

百五十九

百五十九

百五十九

二千四百七年 乙卯 五月 天皇位ヲ皇太子一禪シ皇太子立ツ是ヲ桃園天皇トス

二千四百八年 戊寅 寬延ト改元ス五月朝鮮使ヲ遣ハシテ幕府ノ継世ヲ賀ス十二月琉球使ヲ遣ハ

シテ幕府ニ獻ス

二千四百十年 庚辰 四月 同上皇崩ス

二千四百十一年 辛巳 寶曆ト改元ス六月前將軍徳川吉宗薨ス吉宗性仁明俊勤ヲ以テ天下ヲ率ヒ

大ニ政治ヲ勤ム稱シテ徳川幕府中興ノ主ト云

二千四百十二年 壬午 十二月 琉球使ヲ遣ハシテ幕府ニ獻ス

二千四百二十年 庚辰 四月 將軍家重職ヲ辞ス七月世子家治職ヲ襲テ征夷大將軍ニ任ス

二千四百二十一年 辛巳 六月 前將軍徳川家重薨ス

二千四百二十二年 壬午 七月 天皇崩ス皇姉智子繼ク是ヲ後櫻町天皇トス

二千四百二十四年 甲申 明和ト改元ス二月朝鮮使ヲ遣ハシテ幕府ノ継世ヲ賀ス十一月琉球使ヲ遣ハシテ幕府ニ獻ス

遣ハシテ幕府ニ獻ス

二千四百三十年 庚十一 月天皇位ヲ皇太子ニ禪

皇太子立ト是ノ後桃園天皇トス

二千四百三十二年 壬辰 永ト改元

二千四百三十九年 日 十月天皇崩ス天皇嗣子ニ

太宰帥親王弟五子ヲ迎ヘテ位ニ即カシム是ヲ

光格天皇トス

二千四百四十一年 辛 天明ト改元

二千四百四十五年 乙 九月琉球大ニ飢ユルヲ以

テ幕府金穀ヲ島津氏ニ貸シテ以テ之ヲ賑フ

二千四百四十六年 丙 九月大將軍德川家治薨ス

家治崩年田洲意次ヲ任用シ騎索ヲ極メ繁歎ノ

專ラニ天下多事百姓之ヲ苦シト終ニ臨ラ意

稍悔懣遺命ニテ意次ノ職ヲ罷メ其封ヲ奪ハシ

ム世子家齊嗣ク

二千四百四十七年 丁 三月德川家齊ヲ以テ征夷

大將軍ニ任ヌ六月幕府松平定信ヲ以テ老中ト

ス定信學ヲ好ミ儒ヲ重ニス身儉約ヲ執リ以テ

人ヲ帥ニ時ニ天下奢侈ヲ備フ定信老中タルニ

及ニテ同列皆肅然トシテ曰風ヲ改ム時人語ニ

曰ク京師ニ聖帝在リ関東ニ賢宰出ツ天下淳古

ニ復ル。遠クスト
 二十四百四十九年己寛政ト改元ス五月蝦夷國
 後北海道ノ荷月柄松前北海道ノ監吏及ヒ
 南部ノ商九十餘人ヲ殺ス初メ南部ノ商松前ニ
 請フテ市ヲ國後ニ開ク後テ監吏ニ賂フテ市利
 ヲ專ラニス夷民等之ヲ恨ム月松前テ部下五百
 人ヲ帥テ夜急ニ市場ヲ襲フテ之ヲ殺ス幕府松
 前ニ命シテ之ヲ討セシム松前兵船數十艘ヲ發
 シテ之ヲ討ス未タ至ラスシテ夷民等逃亡ス
 二十四百五十年庚戌三月和蘭船ノ商人幕府ニ請

リ方物ヲ獻ス家齊之ヲ見シ賜フニ時服ノ以テ
 ス九月幕府外船ノ歲額ヲ減ス是ヨリ先キ支那
 十二艘阿蘭陀ニ艘ノ以テ限ラス是ニ至テ支那
 ノ二艘阿蘭陀ノ一艘ヲ減ス慶長年間ヨリ蘭人
 毎歲幕府ニ請リ貢獻ス此ニ至テ改テ五歲ニ貢
 トス十二月琉球使ヲ遣ハシテ幕府ニ獻ス
 二千四百五十二年丑癸九月魯西亞使ヲ遣ハシ蝦
 夷根室ニ至リ好ヲ通シ互市ヲ乞フ幕府石川忠
 房等ヲ松前ニ遣ハシ魯使ニ諭シテ曰ク此地ハ
 外國ノ事ニ預カラス西方ニ長崎港アリ宜シク

彼ニ至ル可シ然レ互市ニ至テハ之ヲ許スヲ
得スト魯使乃チ帰ル

二十四百五十六年^{壬辰}十二月琉球使ヲ遣ハシテ
幕府ニ獻ス

二十四百六十一年^{辛酉}和ト改元ス六月出羽ノ
民大ニ起リテ山形上山等ノ地ヲ侵ス月ヲ踰工

テ乱民稍ク退散ス初ノ上杉治憲英明ニレテ志
ヲ政治ニ專ニシ從來ノ弊政ヲ一洗シ境内大

ニ治マル聲譽四方ニ聞エ上山山形等ノ民常ニ
米澤ノ法ニ倣ハントヲ望ンテ意ノ如クナル

能ハス故ニ之ニ及ハシ是歲紀徳民卒ス徳民ハ
尾張ノ人如ニシテ學ヲ好ミ長スルニ及レテ江

戸ニ教授ス後チ上杉治憲ノ招キニ應シ治憲ニ
説クニ政治ノ得失ヲ以テシ輔佐シテ以テ大ニ

善政ノ改正ス百姓其澤ヲ仰キ號レテ生如未ト
ス

二十四百六十四年^{甲子}文化ト改元ス六月幕府朝
鮮ノ使内地ニ入ルヲ停メ宗義功ヲシテ令ヲ傳

ヘシメテ曰ク今日ヨリ後チ聘獻ヲ對馬ニ受ケ
ク九月魯西地ノ使長崎ニ至リ再々互市好ヲ

通ヒレトトテ請フ幕府許サス

二千四百六十六年丙九月魯西亞ノ兵艦蝦夷ニ

寇シ成卒四人ヲ執ヘテ去ル十一月島津齋宜琉

球使ヲ率ヒテ江戸ニ詣ル

二千四百六十七年丁四月魯西亞ノ兵艦擄北

道十島國ニ寇シ名嶺擄擄三ノ柵ヲ焚キ進チ

舍同計寨上ヲ犯ス時ニ以兵僅カニ數十人カ戦

テ賊ヲ殺ス頗ル多シ寨後ニ奈豫只小アリ賊兵

山上ヨリ銃ヲ發ス我兵苦戦レテ退ク賊兵寨ヲ

焚キ黒城ノ掠ノテ谷ハ幕府檄ノ懸ハレ東陸諸

藩ニ令レテ兵備ヲ嚴ニセシム仙臺秋田函藩

命ヒテ松前ヲ守ラシム五月賊復理并同嶋上ニ

至リ嚮キニ執フル所ノ成卒ヲ帰シ書ヲ齎ラレ

テ箱館ニ至ラシム書意ニ曰ク敢テ互市ヲ乞フ

聴カスハ明年大舉來リ攻メシト十二月幕府

仙臺會津ニ命ヒテ兵ヲ發シテ蝦夷ノ諸要地

北セシム

二千四百六十八年戊八月英吉利船一艘來テ長

崎海ニ泊シ遠ニ上陸シテ人家ヲ抄掠ス且ツ書

ヲ奉行平康英ニ上ツリ糧牛及ヒ薪水ヲ乞フ康

其撥ノ地用ニ飛ハレテ將ニ之ヲ燒夷セントス
翌夜英船捕、去ル康英機ヲ失フヲ悔ヒ自殺レ
テ以テ幕府ニ謝ス十一月仙臺會津ノ兵蝦夷ヲ
守ル者脅逼来リ犯サ、ルヲ以テ盡ク羅メ掃ル
二千四百七十一年^{辛未}三月朝鮮ノ使對馬ニ來ル
以テ幕府ノ繼世ヲ賀ス五月魯西亞ノ船獲理井
尻ニ至ル戌兵擊テ之ヲ却ク
二千四百七十二年中^{壬午}四月松平定信老中ヲ辭ス
定信多才學ヲ好シ文ヲ飲ス其職ニ在ル政道ヲ
改正シ賞罰ヲ公平ニシカメテ教化ヲ行ヒ嚴

奢侈ノ禁ス又多ク有名ノ儒ヲ擢用レ天下ヲレ
テ學ニ向フコトヲ知ラレシム此ニ至テ退隱シ自
カラ樂翁ト号ス
二千四百七十三年^{癸酉}閏十一月後櫻町上皇崩ス
二千四百七十七年^{丁丑}三月^{乙格}天皇位ヲ皇太子ニ禪
ル皇太子立ツ是ヲ^{百子代}仁孝天皇トス
二千四百七十八年^{戊寅}文政ト改元ス五月英吉利
船一艘来テ浦賀ニ泊ス
二千四百九十年^{庚辰}天保ト改元ス
二千四百九十二年^{壬午}十一月琉球使ヲ遣ハレテ

子受

辭

二十四日九十六年丙九月大將軍德川家齊職ヲ
辭ス世子家慶嗣ノ是歲天下大ニ飢エ

二千四百九十七年丁二月大坂町奉行ノ属吏大

鹽平八郎父子同僚七八人ト俱ニ河内吹津ノ民

ヲ煽動シ乱ヲ作ス窮民ヲ援フヲ以テ名トシ旗

幟ニ書スルニ救民ノ二字ヲ以テレ總勢凡ノ五

百人火ヲ大坂市中ニ放テ進ニテ市廳ニ迫ル城

代七井利信以分及ヒ町奉行跡部良弼等兵ヲ發シテ

之ヲ拒メ大ニ賊徒ヲ破ル賊徒進レ走ル市舍皆

火ニ罹ル者凡ノ二万八千餘人ニ至リ二月廿八日

父子謀ニ伏ス初メ賊兵ノ破ル、諸巨魁或ハ自

殺シ或ハ捕縛ニ就ク未タ平八郎父子ノ在ル所

ヲ知ラス既ニレテ涂戸某ノ家ニ匿ル、ヲ訴フ

ル者アリ良弼等士卒ヲ遣ハシテ之ヲ圍ム平八

郎父子火ヲ放チテ自殺ス此ニ於テ平八郎父子

ノ墓及ヒ黨與數人ヲ梟ス賊悉ク平ラタ八月總

川家慶ヲ以テ征夷大將軍ニ任ス

二千五百年庚十一月光格上皇崩ス初メ宇多天

皇諡法ヲ停メテヨリ此ニ至リテ之ヲ復ス

二千五百一年^{辛酉}閏正月前大將軍德川家齊薨ス
二千五百二年^{壬戌}十一月琉球使ヲ遣ハシテ幕府
ニ獻ス

二千五百四年^{甲辰}弘化ト改元ス七月和蘭陀ノ軍
艦長崎ニ來リ國書ヲ呈シ各國ト通信交易セサ
レハ其端ヲ閉クニ至ラント告ク幕府敵シテ許
サス

二千五百六年^{丙午}正月^{三十一日}天皇崩ス^{皇太子立ツ是ヲ}
孝明天皇トス閏五月亞米利加合衆國ノ兵艦一
艘浦賀ニ來リ上書シテ互市ヲ乞フ幕府議シテ

許シテ八月二艘浦賀ヲ來ル是歲魯西亞英吉利

二國亦各使ヲ遣ハレテ互市ヲ乞フ許シテ

二千五百八年^{戊申}嘉永ト改元ス

二千五百九年^{己酉}閏四月英船一艘復來リテ浦賀

ニ泊ス幕府奉行戸田氏榮ヲシテ諭シテ歸ラシ

△五月幕府諸藩ニ令シテ益々海防ヲ修メシム

二千五百十年^{庚戌}十一月琉球使ヲ遣ハシテ幕府

ニ獻ス

二千五百十二年^{壬子}八月長崎ニアル蘭人上言シ

テ曰ク合衆國人將ニ軍艦ヲ帥ヒ來リテ交易ヲ

請トス之ニ接スル寛ナラサレハ兵端ヲ開ク
 至ラント
 二十五年六月合衆國ノ水師提督白瑠
 瑠兵艦四艘五百六十餘人ヲ帥ヒ来テ浦賀ニ泊
 ス奉行戸田氏榮屬吏ヲ遣ハシテ来泊ノ意ヲ問
 フ對テ曰ク國書及ヒ方物ヲ奉シテ通信互市ヲ
 求ム願クハ貴國ノ大臣ニ轉レテ之ヲ獻セント
 幕府諸藩ニ命レテ武藏相模安房上総等ノ海岸
 一化戍ホシム幕府命レテ假館ヲ浦賀ノ西北久
 野濱相起シテ以テ外使應接ノ所トス水戸前

中納言源齊昭ヲ召レテ幕議ニ參與ヒシム浦賀
 奉行戸田氏榮及ヒ林健等ノトシ久里濱ノ部ニ
 請リ白瑠瑠ニ接ヒシム白瑠瑠國書及ヒ產物數
 品ヲ獻ス其書ノ略ニ曰ク西來利加合衆國ノ大
 統領提督白瑠瑠ヲレテ書ク曰
 本國大君殿下ニ呈ス敢テ謹テ請フ所ノ玉ノハ
 通好互市ノ二事ニアリ抑我カ合衆國東西大洋
 ノ以テ疆ス西ニ向テ火輪船ヲ走ラス其ハ十七
 ハ晝夜ニシテ貴國ニ達ス今ヨリ相往來シ國差
 ヲ以テ互ニ貿易セハ必ス各大利ヲ得テ因テ敢

太ノ境隈ヲ定メシニ曰ク互市場ヲ貴國ノ海
口ニ開カント十月幕府答書ヲ魯國ノ使ニ贈ル
答ニ曰ク貴國邊疆ノ交錯ヲ正サント欲ス當ニ
細カニ検査ノ如ハ確實ニ據リ以テ之ヲ議定ス
可シ好ヲ修メ市場ヲ開クノ事ハ我邦昔ヨリ萬
禁リリ然世遠奉レテ失ハス然レモ方今宇内貿
易ノ事日ヲ追テ盛ントリ固ヨリ古ヲ以テ今ヲ
律ス可クラス頃口合衆國亦互市ヲ請フ後表列
國盡ク来リテ互市ヲ請フニ至ラハ我一國ヲ以
テ萬國ニ恚スルカノ給スルヤ給セサルヤ未ダ

知ル可カラズ故ニ事誠ニ輕忽ニハ可カラズ上
ニ京師ニ奏シ下モ列藩ニ告ケ熟議シテ後テ事
ニ從フ可シ領フニ三四年ノ時月ヲ費サ、ルヲ
得ス幸ニ此意ヲ款辦セヨト魯使乃テ還ル是歲
砲臺ヲ品川海ニ築ク且ツ熊本救會津柳川等諸
藩ヲシテ武相總房ノ海岸ニ屯戍セシム
二十五年十四年甲安政ト改元ス正月白瑠璃再
タヒ兵艦七艘六百餘人ヲ帥ヒ来テ浦賀ニ泊シ
本年ノ答書ヲ求ム二月幕府林健井戸學弘等ヲ
遣ハシテ横濱武ニ至リ白瑠璃ニ接ヒシメ和親

意ヲ示ス白瑠璃書ヲ出ス畢、曰ク、謹テ日本
 政府彼合衆國ト相親シムノ命ヲ承ク大慶大幸
 然レトモ條約ヲ定メスニハ兩國ノ人民猶疑心
 ヲ懷カント因テ數條ヲ書シテ之ヲ示ス幕議特
 ニ深民ヲ撫育シ薪水石炭ノ欠乏ヲ給シ及ヒ下
 田伊箱館渡及ヒ長崎ニ泊スルヲ許ス白瑠璃退
 ヒテ下田ニ泊ス三月白瑠璃下田ヲ退帆ハ是時
 ニ當リテ諸藩或ハ和議ヲ唱ヘ或ハ拒絶ヲ主ト
 シ物論置々全國騷然白瑠璃ノ下田ニ泊スルヤ
 長州人吉田松陰潛カニ白瑠璃ノ艦ニ就キ候

航セト請ノ白瑠璃肯セク之ノ送リ還ス其國
 禁ヲ犯スヲ以テ幕府松陰ヲ獄ニ下ス事佐久間
 象山ニ連ナル亦之ヲ獄ニ囚フ松陰曾テ象山ニ
 學ブ象山曰ク方今ノ勢宜シク海外ニ航シ各國
 ノ形勢ヲ審ニスヘント松陰之ヲ聞キ大ニ感奮
 スル所アリ竊カニ航海ノ志ヲ抱ク此ニ至リ江
 戸ニ赴キ象山ニ謀ル象山密ニ計ヲ授ク既ニシ
 テ事遂ニ成ラス故ニ之ニ及ヘリ象山ハ松代藩
 ノ人博學ヲ識傍々洋書ニ通ズ聞テ月英吉利ノ
 兵艦長崎ニ來リ書ヲ出シテ曰ク當今我英國魯

而更... 是以テ貴國ノ追奪ニ於テ或ハ
其ノ... 貴國素々之ヲ給與セヨト幕府會議之ニ答テ曰
ク魯西亞ノ事アルニ由リテ給與ヲ乞フ我邦ノ
魯西亞ニ於ル未タ通信ヲ約セスト雖モ去歲彼
使ヲ遣ハシテ通信ヲ求ム議定シテ將ニ之ニ答
ヘントス是以テ貴國魯西亞ヲ伐ツヲ以テ乞ハ
義之ヲ給スル能ハス但窮乏ニ由リテ乞フトキ
ハ之ヲ給スヘシ且ツ入泊長崎箱館兩港ヲ除ク
ノ外人泊ヲ許サス英艦乃チ選ル十月魯西亞ノ

兵艦來リ下田ニ泊ス幕府使ヲ遣ハシ書使ニ會
レ下田長崎箱館三港ニ泊レ及蕪水石炭ノ欠乏
ヲ給スルヲ許ス籌キニ合衆國ニ許ス所ト詞
是ヨリ先キ和蘭陀ニ亦前件ヲ許ス
二千五百十五年乙卯四月幕府仙臺秋田兩藩ニ命
シテ東西蝦夷ヲ成ラシム十月關東地大ニ震シ
江戸尤甚シ諸藩邸士民屋舍壞倒無算壓死スル
者十萬餘人
二千五百十六年丙辰七月合衆國人^ハ巴^バ兒^ニ理^リ斯^ス下田
ニ來リテ向ク水國ヨリ全權ヲ委任サレ日本滯

在ノ命ヲクハシテ帯ヒル所ノ國等ヲ幕府ニ呈
人ノ記シテ通信互布ヲ請ヒ是般大坂海口ニ地
臺ヲ築ク

二十五年十七年巳丁正月水戸中納言齊昭幕議ニ
奏スルヲ辨ス初メ齊昭幕内ノ鐘ヲ鐸ニ火器ヲ
造ルヲ以テ江戸ノ別邸ニ幽セラル嚮キニ老中
阿部正弘幕旨ヲ以テ其罪ヲ解キ幕議ニ參セシ
ム齊昭ノ意蓋シ外人ヲ拒絶セント欲シテ幕府
外人ヲ待ツ其意ニ滿タス故ニ之ニ及ヘリ是時

ニ當リ巴兒理斯下田ニアリ屢幕府ニ請ケ將軍
ニ謁セントス幕議之ヲ許ス齊昭及ヒ二三ノ諸
侯書ヲ以テ其不可ヲ議ス九月巴兒理斯江戸ニ
來リ將軍ニ謁シ本國ヨリ已レニ任スルノ書ヲ
呈ス退テ閣老ニ面シ條件ヲ掲ケテ曰ク金穀ヲ
除クノ外一般ノ交易兩國ノ商人互ニ之ヲ謀ル
ヲ得シ下田港ヲ鎖シ神奈川大坂ノ兩港ヲ開カ
シ全權公使一人ヲ江戸ニ磨キ交際ノ事務ヲ裁
セシメン大小ノ事悉ク條約ヲ定メ以テ日本政
府ノ印證ヲ得ント幕府牧議ヲ憚リ朝裁ヲ乞ハ

レシテ欲レ十二月林健等ヲ京師ニ遣ハシ之ヲ請
フ朝議許サス

二千五百十八年戊午正月幕府老中坂田正篤ヲ京
師ニ遣ハシ復之ヲ請フ朝議紛然四月正篤事行
レサルヲ以テ江戸ニ帰ル而シテ巴兒バール理斯條約
ノ命文フシテ至ラサルヲ以テ屢幕府ニ逼ル幕
府井伊直弼ヲ以テ大老職ニ任メ六月合衆國及
魯西亞ノ軍艦横濱ニ來リ報シテ曰ク英吉利佛
蘭西ノ軍艦持ニ來リテ條約ヲ結フヲ請ントス
ト是ニ於テ巴兒理斯條約ヲ促カス益急ナリ井

伊大老以為ラク各國輻奏此ノ如シ朝議未夕定
ラス事若シ遲緩ヒハ恐ラクハ支那ノ覆轍ヲ踏
ント終ニ神奈川ニ於テ條約ヲ結ヒ其車ヲ京師
ニ奏ス七月魯英蘭三國ト合衆國ノ例ニ依リ亦
條約ヲ結フ是時ニ當リ鎖港攘夷ノ說大ニ起リ
全國騷然八月大將軍徳川家定薨ス源家茂タカノブ紀州
ヨリ入りテ之ヲ嗣ク尋テ征夷大將軍ニ任ス年
甫メテ十二井伊大老如主ヲ擁シ威内外ニ振フ
九月佛蘭西ト條約ヲ結フ前例ノ如シ尾張大納
言水戸前中納言松平中將等井伊大老ノ專横ヲ

日 其 之 之 責 大 老 三 家 論 其 登 城 之
禁 是 月 朝 廷 内 言 水 戸 中 納 言 下 幕 府 之
輔 外 夷 之 横 ハ シ ム 是 時 當 朝 紳 ノ 家 士 及
儒 者 等 幕 府 勅 許 ヲ 待 タ ス 條 約 ヲ 結 ブ ノ 事 ヲ
以 テ 井 伊 大 老 ヲ 議 ス ル 者 太 々 衆 シ 大 老 間 部 老
中 ヲ 京 師 二 遣 ハ シ 朝 紳 數 家 ヲ 幽 シ 其 家 士 小 林
氏 部 等 及 ヒ 橋 本 左 内 頼 三 樹 等 ヲ 捕 ヘ テ 江 戸 二
檻 致 ス

二 千 五 百 十 九 年 巳 八 月 水 戸 中 納 言 永 夕 水 戸
二 禁 錮 入 是 ヨリ 先 キ 中 納 言 意 見 ヲ 書 シ テ 京 師

二 奏 問 又 執 政 之 ヲ 聞 キ 請 メ テ 曰 ク 公 自 身 二 意
見 ヲ 京 師 二 奏 ス ト 聞 ク 王 公 ノ 任 幕 府 ヲ 輔 ク ル
二 在 リ 今 乃 チ 然 ラ ス 殆 二 ト 公 武 ノ 間 割 カ ン
ト ス ト 故 二 之 二 及 ヘ リ 遂 二 一 橋 刑 部 卿 及 ヒ 尾
張 大 納 言 越 前 中 將 土 佐 前 少 將 等 ヲ 以 テ 其 事 二
與 カ ル ト ン 家 ヲ 嗣 子 二 讓 リ 退 隱 ヒ シ ム 十 月 小
林 氏 部 等 ヲ 流 或 ハ 禁 錮 二 處 シ 橋 本 左 内 頼 三 樹
等 ヲ 斬 ル 是 月 吉 田 松 陰 亦 刑 二 死 ス 是 ヨリ 先 キ
松 陰 禁 錮 シ テ 藩 二 ア リ 後 々 免 レ テ 家 二 還 ル 時
二 井 伊 大 老 政 ヲ 執 リ 親 藩 離 畔 シ 幕 府 孤 立 ス

松陰幕府ノ輔ク可カラサルヲ知リ自カラ尊王
攘夷ノ説ヲ唱ヘ以テ藩論ヲ鼓動シ以テ為ルコ
ト有ラント欲ス幾何モナク幕府松陰ヲ疑ヒ江
ノ三港ヲ開キ内外人民ノ貿易ヲ許ス
二千五百年申萬延ト改元ス三月浪士十七
人大老井伊直弼ヲ途ニ刺シ之ヲ殺ス大老ノ尾
水越ヲ罰スル上下屏息道路目ヲ以テス是ヨリ
大老威権益熾ニナリ水戸脱藩ノ浪士大関和七
郎佐野竹之助半江戸ニアリ大老ノ登城ヲ窺ヒ

櫻田門外ニ於テ之ヲ刺シ衛士拒キ戦ニ互ニ死
傷アリ然レ事不興ニ起リ衛士狼狽終ニ大老ヲ
救フ能ハス浪士數人老中脇坂安宅ノ邸ニ詣リ
大老ノ罪狀書ヲ出レ因テ遠カニ死ニ就クント
詩ヲ後管刑ニ死ス是歲葡萄牙獨逸二國ニ條約
ヲ結フ始テ合衆國へ使節ヲ遣ハス
二千五百二十一年西曆文久ト改元ス正月是ヨリ
先キ攘夷ヲ唱フル徒常陸下総ニ起ル遠ニ蔓延
シテ上野下野ノ間ニ及フ五月浪士數人英ノ旅
館高輪東禪寺ヲ襲ヒ英人二名ヲ傷ク英ノ公使

怒リ兵ヲ用テ逼ラントス幕府百方之ヲ謝レ事
平ラクヲ得タリ八月水戸前中納言齊藤兼光是
歲始テ其禮齊蘭等ハ使節ヲ遣ハス

二十五百二十二年壬戌正月浪士數輩坂下門外ニ

安藤老中ヲ刺ス衛士力拒キ老中肩ヲ傷キ僅ニ

身ニ免カレ四月幕府長州人永井雅樂ヲ召ク雅

樂素ヨリ和議ヲ上トスル者幕府由テ雅樂ヲシ

テ京師ニ至リ改テ條約ノ執許ヲ請ハシム是時

ニ當リ攘夷ノ説大ニ起リ雅樂ヲ惡ム者多シ雅

樂要領ヲ得スルニテ帰ル後十長藩軍ヲ以テ雅樂

ニ死ヲ賜フ六月幕府ニ勅レテ曰ク將軍吹小名

ヲ率ヒ京師ニ朝シ會議シテ國論ヲ定メテ曰ク

一橋刑部卿ヲ以テ將軍ノ後見職トシ越前中

將ヲ大老ニ任セヨ七月幕府朝命ヲ奉レ一橋刑

部卿ヲ以テ中納言ニ任シ將軍ノ後見トシ越前

中將ヲ政事總裁職トス閏八月幕府松平容保ヲ

以テ京師守護職ニ任ス

二十五百二十三年癸亥三月將軍家茂京師ニ朝ス

即日關ニ詣リ退テ二條城ニ命ス將軍家光ヨリ

此典廢絶スル二百餘年四月將軍及ヒ一橋中納

言板倉老中以下關ニ諸ノ勅ニテ攘夷ノ期限ヲ
定ム是月幕府機濱在留ノ各關公使ニ告テ曰ク
邦内人心外交ヲ好マス勅ニスレハ外國人ヲ殺
サントスル者衆シ我政府殆ント謀慮ニ苦シム
因テ朝廷命シテ各國ハ諭シ諸港ヲ鎖シ外交ヲ
絶シム其レ此意ヲ領セヨト公使等答テ曰ク已
ニ條約ヲ結シ今概ナ之ヲ滿ハント欲スルカ恐
フクハ貴國意外ノ災下ラレ且吾儕水國ノ命ヲ
受ケ貴國ニ在リ專ラム大事ヲ斷スル能ハス貴
國之ヲ水國ニ謀レト幕府因テ使節ヲ海外ニ遣

ハサントトハ九月英公使節用渡ニ來リ將ニ諸ノ所
ヲラントス是ヨリ先ニ勅使大原左衛門督江戶
ニ下ル島津家之ニ從フ事終リ京師ニ歸ル途生
癘疾ニ過ク時ニ英人數輩馬ヲ馳セ島津家ノ前
驅ヲ衝ク衛士之ヲ擊殺ス此ニ至テ英人書ヲ幕
府ニ出シテ曰ク去年我英國七官ヲ殺ス者ヲ捕
ハ之ヲ刑セン然ラサレハ贖金五十萬元ヲ日本
政府ニ得ント幕議累月遂ニ贖金ヲ英國ニ與フ
七月英人軍艦ヲ率ヒテ薩州鹿兒嶋ニ來リ曰ク
主來ノ直日本政府ノ我英國ノ間ハ事已ニ成ラ

日
 者ノ妻子ヲ養ントスト薩藩將ニ答フル所ア
 ラントス英人政扈安リニ我カ兵船ヲ奪フ時大
 風雨ニ會ス薩兵之ニ乘レテ英船ヲ撃チ砲撃數
 合遂ニ英船ヲ却シ既ニレテ英人再舉ヲ圖ント
 島津家乃チ金二萬元ヲ幕府ニ借リ之ヲ與フ
 事乃チ成ラシ是ヨリ先キ攘夷ノ詔下ルガ長藩
 大ニ赤備關^長門ノ壘寨ヲ修メ外船ノ退クル毎ニ
 之ヲ砲撃ス是月幕府侯ヲ長藩ニ遣ハシ禮ニ外
 船ヲ撃ツテ責ム長藩服セス是ヨリ幕府長藩ノ

間隙ヲ生スルニ至ル八月是ヨリ先キ朝廷幕府
 長藩ヲ疑ヒ其朝議ニ與カルヲ欲セム此ニ至テ
 其京師宿衛ヲ罷ム長人等朝議ノ寢スルヲ察シ
 刑率ニテ藩ニ歸ル三條家以下七卿亦長州ニ奔
 ル朝廷乃チ七卿ノ官爵ヲ削リ毛利家ノ入京ヲ
 禁ム是時ニ當リ松本謙三郎安積五郎等攘夷ノ
 説ニ唱ヘ兵ヲ大和ニ起シ近州ニ蔓延ス其兵凡
 ソ十人号シテ天忠組ト稱ス遂ニ五條縣^大ヲ襲
 ヒ官吏數名ヲ殺ス幕府紀州彦根津郡山藩等ニ
 命シテ之ヲ討ツ月ヲ踰ヘテ車平ヲ十一月幕

七卿者
 三條家光
 西三條赤子知
 四條隆房
 東久世通直
 錦小路義徳
 生其佐
 澤田昌高

府池田筑後守等ヲ海外諸國ニ遣ハシ鎖港ノ事
謀ル朝廷因テ諸藩ニ勅シテ幕府ノ指揮ヲ待
シ此ニ於テ攘夷ヲ唱フル者相率ヒテ長州ニ
走ル是歲瑞西國ト條約ヲ結フ
二十五百二十四年甲子元治ト改元ス正月將軍家
茂再々ヒ京師ニ朝ス五月朝廷盡ク政ヲ幕府ニ
委任シ七卿及ヒ長藩ノ處置ヲ命ス此ニ於テ將
軍東ニ帰ル是時ニ當リ水戸藩内分レテ兩派ト
シ藤田小四郎等攘夷ヲ主トシ兵ヲ常野ノ間
起シ小四郎ハ兜之助ノ三男ナリ幕府近傍ノ

諸藩ニ令シラ之ノ後藤田ノ往還ニ筑波山
常陸ニ據リ兵鋒頗ル銳シ是月長州國老福原越後
兵四百ヲ率ヒ海路大坂ニ至リ進シテ伏見ニ表
ル既ニシテ國老國司信濃益田右衛門亦兵數百
ヲ率ヒ至リ國司ハ嵯峨ニ益田ハ山崎ニ陣ス是
時ニ當リ諸藩ハ兵京師ニ充塞シ諸門ヲ護ルニ
橋中納言松平養保等長人兵ヲ以テ朝廷ヲ要ス
ルトニ朝旨ヲ請ヒ諸藩ニ令シ之ヲ伐シム京師
騷擾市民皆負擔奔竄ハ長軍之ヲ聞キ先發シテ
之ヲ制セント七月十九日曉ヲ侵シテ直ニ京師

通シ差我ノ軍先ツ入り兵ヲ分ツテ中立賣給
二門ニ向フ一橋薩州會津ノ兵拒テ戰ハ互ニ
勝敗アリ既ニシテ薩ノ別隊俄カニ長軍ノ後ヲ
撃ツ長軍顧ミテ驚ク一橋ノ兵勢一兼ニ夾ミ撃
ツ長軍終ニ敗走ス山崎ノ長軍並田等ヲ留メテ
後援トシ久坂義助等兵五百ヲ率ヒ差我ノ軍ニ
後トテ来リ鷲司邸ニ據ル越前彦根東名ノ兵之
撃ヲ利アラサス薩會ノ兵援ヒ至リカヲ供セテ
長軍ヲ撃ツ兩軍ノ銃聲雷ノ如ク五藩ノ兵鷲司
邸ヲ燒シ入ニ長軍ヲ破レ此戰卯ヨリ己ニ至ル

久坂等皆出ス伏見ノ長軍夜半伏見ヲ發ス大坂
ノ兵伏ヲ道傍ニ設ケ長軍ノ至ルヲ伺ヒ之ヲ撃
ツ長軍潰走ス故ヲ以テ京師ニ入り師一會スル
鉄ハス是月池田銃後守等歐羅巴ヨリ帰ル物
池田等鎖港ノ命ヲ奉シ各國ニ使シ先ツ佛國
至リ鎖港ノ事ヲ説ク佛人却ケテ答ヘス池田等
親シク彼ノ文物矚然タルヲ觀テ大ニ悟ル所
リ遂ニ他邦ニ行クスニテ歸リ事ノ説クヘカニ
ナルヲ陳ス幕府其使事ヲ終ハサルヲ責メ池田
等ノ食禄ヲ削リ退隱ヒシム八月幕府朝廷ニ請

七毛利家一族、官爵ヲ削リ長防追討ノ令ヲ諸
 藩ニ下シ尾張大納言ヲ以テ總督トシ薩州以下
 十一藩、兵ヲ分テ向テ所ヲ定ム時ニ橫濱在留
 各國公使幕府長州ヲ伐ツ、令出ルヲ聞キ是月
 五日軍艦十餘艘ヲ以テ亦開闢ヲ變テ長兵防キ
 戰テ各國ノ兵遂ニ上陸ス長兵奮戰互ニ勝敗ア
 リ既ニシテ長藩各國ニ諭シ兵ヲ罷メシム十月
 琉波山ノ徒兵鋒益銳シ是ヨリ先ト武田伊賀亦
 藤田等ニ喚ビス此ニ於テ相謀リ京師ニ至リ事
 ヲ請フト十一月見舞八百ヲ以テ中仙道ニ出シ

幕府公道ノ諸藩ニ令レテ之ヲ擊ム武田等行
 諸藩ノ兵ヲ破リ遂ニ進シテ美濃ニ入ル將ニ直
 ニ京師ニ入ラントス彦根大垣ノ兵要地ヲ扼守
 スルヲ以テ道ヲ轉シテ越前ニ向フ時ニ加州ノ
 兵江州ノ要塞ヲ守ル武田等使者ヲ以テ加州ノ
 軍ニ請フテ曰ク吾輩將ニ京師ニ事情ヲ陳セニ
 ト欲ハ願クハ路ヲ啓ケ如州ノ兵肯セス武田等
 計窮リ終ニ加州ニ降ル加州之ヲ幕府ニ報ス幕
 府武田等ヲ各藩ニ幽ス明年春武田等ヲ斬ニ處
 ス十二月尾張大納言諸藩ノ兵ヲ督シ藝州ニ次

レ毛利家ノ罪ヲ問フ毛利家一意恭順ヲ表ス時
ニ長州藩士京師ノ變ニ関ラザル者等相謀リテ
菟田福原國司等ヲ禁錮シ藩主父子ヲ寺院ニ幽
ス此ニ至リ三老等ヲ斬リ首級ヲ出シ罪ヲ謝ス
大納言謝罪ノ實効ヲ檢シ狀ヲ幕府ニ報ス
二十五年^乙慶應ト改元ス正月大納言
終ニ師ヲ班ハレ大坂ニ帰ル長州ニアル五卿ヲ
薩州筑前肥後ニ遷ス是時ニ當リ長州藩内分レ
テ兩派トナリ恭順ヲ主トスル者ヲ指シテ俗論
黨トス俗論黨ノ三老以下ヲ殺ス高杉晋作等

之ヲ憤然ニ激シ時ニ長州藩ニ以テ恢復ノ圖
ニ其兵ヲ募ル門閥ヲ論ヒス士庶ヲ問ハス專ラ
強健ノ者ヲ擇ビ行伍ニ充ツ号シテ奇兵隊ト云
俗論黨之ヲ聞キ幕府ニ訴ヘ兵ヲ發シテ之ヲ擊
ソ奇兵隊之ヲ拒キ遂ニ俗軍ヲ破リ首謀數人ヲ
刑ス此ニ於テ一藩嚮背ヲ定メ藩論粗定マル高
杉等藩主父子ヲ山口ニ奉レ相謀リテ曰ク幕府
必ス再々ヒ兵ヲ致サン我諸君ト與ニ之ヲ拒カ
ニ諸君其レ努力セヨ衆皆躍躍自カラ奮フ四月
幕府再々ヒ長ヲ伐ツノ令ヲ布ク尾張大納言書

幕府ニ出シテ曰ク長州已ニ三老ヲ刑シテ罪
ヲ謝ス今又再々兵ヲ用ヒント欲スルハ何ソ
ヤ彼ノ罪尚問フ可キアラハ天下皆討ソ可シト
言テ之ヲ討シ何ノ曉暎ノ事ヲ以テ妾リニ兵ヲ
動カサント欲スルヤ幕府之ヲ熟計セヨ幕議聽
カス閏五月將軍遂ニ海道ヨリ京師ニ入り尋テ
大坂ニ達ス十月横濱在留ノ各國公使等兵庫ニ
来リ書ヲ出シ條約ノ勅許及ヒ兵庫ノ開港ヲ請
フ一橋中納言等朝廷ニ奏シ改テ勅許ヲ請フ朝
議乃チ之ヲ許ス特ニ兵庫港ヲ開クヲ許サス十

二月幕府長州ノ國老ヲ大坂ニ召ス與戸脩後以
廣島ニ至ル幕府藩内ノ迫狀疑フ可キ者ヲ舉テ
之ヲ詰ル脩後以具リニ之ヲ辨説ス幕府聽カス
之ヲ廣島ニ幽ス幕府遂ニ諸藩ノ兵ヲ廣島ニ進
ム
二十五百二十六年^{丙寅}四月是ヨリ先キ幕府長州
ヲ伐ツノ令ヲ諸藩ニ布ク此ニ至リテ薩藩師ノ
名ナキヲ唱ヘ兵ヲ出スヲ辭ス初メ京師ノ喪薩
藩痛ク長兵ヲ撃テ捕獲頗ル多シ既ニシテ藩士
等相言テ曰ク方今兵ヲ國內ニ結フハ上策ニ非

ス宜シク海内一致以テ皇國ヲ保護ス可レト長
 ノ捕囚ヲ還シ密使ヲ長州ニ遣ハシ好ヲ通ス此
 ニ於テ兩藩始メテ怨ヲ解ク是月幕府令ヲ長州
 ニ下シテ曰ク嚮キニ恭順ノ實ヲ著ハスト雖
 爾來藩内騷擾駕馭道ヲ失フノ責終ニ免レ難シ
 故ニ奏レ請フテ三事ヲ罰ス曰ク封十萬石ヲ削
 ル曰ク藩主父子ノ終身ヲ禁錮ス曰ク三老ノ家
 ヲ絶ツ因ラ日ヲ限リ奉命ノ答書ヲ致シム
 藩憤怒益防禦ヲ修メ幕兵ヲ迎戰ハント肯テ答
 書ヲ致リメ六月幕府遂ニ令シテ兵ヲ藝州石州

及ヒ豊前三道ヨリ是ヒ進ム小笠原壹岐豊前
 軍ヲ指揮セント小倉ニ至ル三道ノ東軍皆進
 テ長防ノ境ニ逼ル長軍境外ニ迎戰フテ互ニ勝
 敗アリ既ニ石州ノ東軍敗走シ長軍遂ニ石
 州ヲ畧取ス藝州ノ東軍亦利アラステ退ク長
 軍藝州ノ境内ニ進入ス豊前ノ軍將ニ赤間関ヲ
 襲ハントス長軍三艦ヲ以テ田之浦豊前ニ逼リ上
 陸シテ小倉ノ兵ト戰フ小倉ノ兵力拒ク長軍遂
 ニ退ク七月長軍復出テ大里豊前及ヒ田之浦ヲ畧
 取ス小倉ノ兵拒クコト鉞ハス肥後ノ兵長軍ヲ

迎撃テ之ヲ破ル長軍退テ大里ニ屯ス小笠原壹
岐指揮宜シキヲ失フヲ以テ肥後柳川ノ兵皆引
去ル壹岐狼狽長崎ニ走ル小倉孤立ス長軍勢ニ
ニ乗レ小倉ヲ襲フ小倉遂ニ城ヲ燒キ香春カハル前カハルニ
去ル八月藝州ノ東軍復進ニテ長軍ヲ撃ツ遂ニ
利アラヌ是月將軍德川家茂大坂ノ軍中ニ薨ス
朝廷將軍ノ薨スルニ因テ勅レテ長州ヲ伐ツノ
兵ヲ罷シム幕府諸藩ニ令レテ兵ヲ退ケンム長
兵亦尋テ退ク九月一橋中納言德川慶喜ニ勅レ
テ幕府ヲ嗣レ入尋テ征夷大將軍ニ任ス十二月

天皇崩ス今上天皇即位ハ是歲白耳義伊太利丁
抹三國ト條約ヲ結フ
二千五百二十七年卯四月松平春嶽鍋島綱叟山
内察堂及ヒ島津久光等上京ス是ヨリ先キ將軍
奏ニ請フテ名望ノ諸侯ヲ京師ニ會シ共ニ事ヲ
謀ラントス朝廷之ヲ許ス將軍自カヲ書ヲ作リ
テ之ヲ召ク此ニ至リテ皆未朝シ五月兵車港ヲ
開ク九月是ヨリ先キ山内容堂病ヲ以テ薨ニ婦
リ竊カニ國內ノ紛擾ヲ憂ヒ悉ク政權ヲ朝廷ニ
歸セント欲ス是ニ至リテ書ヲ將軍ニ出シテ曰

ク議々意々中古以還政刑武門ニ歸スルト雖也
洋船未舩物議紛々内訌已ハ時ナシ是政令ニ途
ニ出ラ天下嚮フ所ヲ知サル故ナリ宜シク政權
ヲ朝廷ニ歸シ以テ万國長立ノ基礎ヲ立テ是
今日ノ急務幕下ノ賢蓋シ亦之ヲ知レト因テ其
藩士後藤東次郎等ヲ遣ハ、親レク之ヲ説カレ
ム薩藩士小松帶刀亦京師ニアリ將軍屢兩人ヲ
延キ時勢ヲ談ス兩人益前議ヲ執リ將軍ニ勸メ
政柄ヲ解カレム將軍因テ書ヲ作り譜代ノ諸士
ニ示スニ政令一途ニ出テリル可カラサルヲ以

テ盡ク政權ヲ朝廷ニ歸セント欲スルノ意ヲ以
テハ諸士或ハ陰ニ不服ノ意ヲ抱ク者多シ十月
將軍上書シテ軍職ヲ返サシコトヲ請フ朝廷之
ヲ許ス且ソ詔シテ曰ク諸侯ノ進退ヲ陰クノ外
諸藩入京ノ後チ之ヲ決セシ自余ノ事務ハ姑ク
ク旧ニ依リ之ヲ掌サトレト是時ニ當リ物議紛
々未タ定ラズ是ニ於テ朝紳及ヒ薩藩士等ノ藩士
復古ノ議ヲ起ス者以テラク事若シ遲緩ニハ機
會ヲ失ハシ遂ニ激論ヲ以テ朝廷ヲ鼓動ス十二
月九日詔シテ遷ニ會津藩ノ九門宿衛ニ罷メ薩

土等諸藩ヲレテ之ニ代ラシム又拱閑ノ職及ヒ
幕府ヲ發シ總裁議定參典ノ三職ヲ置キ諸攻ヲ
綜ヘシム令ヒテ曰ク今ヨリ大小ノ政務悉ク朝
廷ヨリ出ツ四方其レ之ヲ賦セヨト源賴朝霸府
ヲ開キレヨリ政權武門ニ歸スル六百八十二年
此ニ至リテ政權復朝廷ニ歸ス是月詔シテ毛利
家ヲ京師ニ召ス毛利家入京ス詔シテ一族ノ官
爵ヲ復ス尋テ六卿ヲ召シテ歸京セシム内大臣
德川慶喜松平容保松平越中等ヲ率ヒ大坂ヲ下
ル初メ九日ノ令下ルマ慶喜諸藩上京衆議ヲ以

テ事ヲ決スルノ朝命ヲ執リ且ツ九日ノ議ニ與
カラサルヲ繼ク上表シテ前キノ朝命ニ依リ尚
政務ヲ執ルコトヲ陳ス時ニ薩長及ヒ自餘ノ諸
侯宮闈ノ守リ德川氏ノ將士二條城ニ據リ屹然
相對ス物情恟々タリ慶喜臣下ノ暴動ヲ鎮セシ
ト書ヲ上ツリ遂ニ大坂ニ下ル朝議其舉動ヲ怪
ミ會衆兩藩ノ入京ヲ禁ス是時ニ當リ議定參典
議シテ曰ク政朝廷ニ歸スト雖モ費用ノ充ソ可
キナレ之ヲ德川及ヒ諸藩ニ課セサル可カラズ
因テ尾張越前兩家ニ詔シテ往テ慶喜ヲ諭シ其

入京ヲ命ス慶喜朝旨ヲ奉ス然レモ意自カラ安

二千五百二十八年戊辰明治ト改元人正月尾越兩

家京師ニ歸ル松平容保松平越中及ヒ徳川ノ臣

屬等大坂城ニ會シ慶喜ニ説テ曰ク尾越兩公ノ

言未タ信ス可カラズ主公入京セハ臣等死ヲ以

テ從ハント慶喜遂ニ會東兩藩ヲ先驅トシ京師

ニ入ラントス事京師ニ聞エ朝議即チ薩長ノ兵

ヲ出シ伏水鳥羽兩道ノ関ヲ塞カシム慶喜既ニ

大坂ヲ發シ兩道ヨリ進ム使ヲ遣ハシ兩道ノ関

ヲ過ント請ニ伐兵請リ一時京師ノ

東軍萬餘人ト稱ス東軍由テ

發シテ之ヲ拒テ東軍亦銃ノ發レ砲戰數回東軍

遂ニ敗走ス遂東軍復進シ京師之ヲ伏見鳥羽ノ

間ニ拒テ東軍勢頗ル猖獗朝廷仁和寺宮ヲ總督

トシ錦旗ヲ出タレ賊兵ヲ討セシム賊軍遂ニ敗

レテ淀城ニ走ル翌黎明官軍淀ヲ攻ム賊伏ヲ設

ケテ官軍ヲ誘キ之ヲ破ル官軍憤激奮ヲテ之ヲ

擊ツ賊兵遂ニ敗レ淀城ヲ棄テ橋本山ニ走ル官

軍追撃シ大ニ之ヲ破ル賊軍悉ク大坂ニ走ル慶

喜會東國藩主及板倉伊賀等率軍艦乘
海路江戸走仁和尚寺宮進大坂至官
軍既大捷得遂兵近國出嚮背問
諸藩皆靡然帖服詔德川慶喜以下官
爵削四方令大東征師起サント
諸藩兵徴有柵川宮以征東總督ト
錦旗節刀賜三月各國公使入朝天皇
皆王政盛事賀更兩國交誼ヲ約ス是
月二條城ヲ以テ太政官トス天皇此臨公卿
諸侯列坐誓曰ク廣ク會議ヲ興シ萬機公論

決スヘシ上下心ヲ一ニレ盛シニ經綸ヲ行フ
レ官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲ
レテ倦サレシメンコトヲ要ス旧来ヲ融習ヲ破
リ天地ノ公道ニ基ク可シ知識ニ世及ニ求ノ大
ニ皇基ヲ振起ス可シ詔シテ曰ク我國未曾有
ノ事ヲ為シテ朕躬ヲ以テ衆ニ先ニレ天地神
明ニ誓ヒ大ニ斯國是ヲ定メ万民保全ノ道ヲ立
ントス衆亦此吉趣ニ基キ懃心努カマヨ公卿諸
侯對奏シテ曰ク勅意宏遠誠ニ感銘ニ堪ヘス今
日ノ急務永世ノ基礎此他ニ出ヘカラス臣等謹

テ敷言ヲ奉戴シ死ヲ誓ヒ龜龜從事ヲハ以テ
疾憊ヲ安ニ奉ラント既ニヒテ天皇親ムラ關東
ヲ征セント大坂ニ幸ス是時ニ當リ官軍道ヲ分
ソラ江戸ニ向フ報江戸ニ至ル徳川ノ臣属及ヒ
譜代ノ諸藩士等相會ニテ軍事ヲ議ス或ハ箱根
ノ險ヲ扼セント言ヒ或ハ海軍ヲ以テ大坂ヲ擊
ト言ヒ論議紛々時ニ慶喜既ニ前事ヲ悔ヒ恭
順ヲ主トシ衆議ヲ斥クテ用ヒス獨リ大臣等ト
謀リ書ヲ以テ臣属ニ諭告ニ遂ニ城ヲ出テ上野
寛永寺ノ麻屋ニ此ニ於テ臣属慶喜ノ恭順ヲ脱

ハサル者脱シテ四方ニ走ルニ道官軍治道ノ賊
兵ヲ破リ將ニ江戸ニ入ラントス海道ノ官軍既
ニ品川驛ニ達ス徳川ノ重臣品川ニ未リ参謀ヲ
見テ備サニ慶喜恭順ノ意ヲ陳ス参謀之ヲ總督
官ニ啓ス總督官時ニ駿河ニ至ル乃チ衆議シテ
江戸攻撃ノ事ヲ止メ令テ諸軍ニ傳フ官軍盡ク
江戸ニ入り各所ニ屯營ス四月勅使江戸城ニ入
リ宣旨ヲ授ク曰ク城及ヒ軍艦銃砲ヲ獻セヨ曰
ク慶喜ノ逆ヲ助クル者死一尋ヲ減ヒ罪ヲ定メ
之ヲ奏セヨ曰ク慶喜ノ死一尋ヲ宥ヒ水戸ニ屏

居ヒシメント慶喜即チ水戸ニ退ク是ヨリ先キ
 松平容保國邑會津ニ退ク時ニ會藩士及ヒ脱走
 兵下總上野ノ間ニ屯集シ勢頗ル振フ是時藤根
 藩等ノ官軍宇津宮野下ニアリ賊軍之ヲ襲ハント
 急報江戸ニ至ル江戸ノ官軍赴キ援フ賊ノ別
 軍ヲ流山總下ニ破リ勢ニ乘ンテ下野ニ至リ結城
 ヲ攻メテ之ヲ拔キ進ンテ守都宮ニ至ル既ニシ
 テ賊軍精銳ヲ撲ビ末リテ結城ヲ攻ム賊軍善戰
 結城遂ニ陷ル官軍走リテ守都宮ニ集マル賊
 軍直ニ進ニテ守都宮ヲ攻ム官軍之ヲ城外ニ拒

シ賊軍奮戦官軍支フハ蝕ノス退テ城ニ據ル賊
 兵益如ハリ齊シク進ンテ城ニ迫リ砲聲大振
 震フ官軍遂ニ城ヲ棄テ去ル守都宮遂ニ賊ノ據
 ル所トナリ急報江戸ニ至ル朝廷因ニ薩長土因
 諸藩ノ兵ヲ遣ハシテ之ヲ援フ官軍勢ニ合セテ
 守都宮ヲ攻ム官軍頗ル苦戰終ニ之ヲ陥ル賊
 兵日光ニ走ル官軍遂ニ守都宮ヲ復シ閏四月朝
 廷詔レテ田安龜之助ヲシテ宗家ヲ嗣カシム然
 ル封額未タ定ラサルヲ以テ臣屬等議論紛々既
 ニシテ城及ヒ兵器ヲ收メラル臣屬等益憚ハス

往々黨ヲ結ビ相集ル遂ニ自々ヲ彰義隊ト唱ヘ
上野ニ據リ輪王寺宮ヲ謀カシ擁シテ車ヲ謀ラ
ント、朝議遂ニ彰義隊追討ノ令ヲ下シ五月諸
藩兵ノ向フ所ヲ部署ス十五日黎明官軍齊シク
上野ニ進ル賊銳意門ヲ出テ官軍ヲ衝ク官軍廣
小路ニ退ク適大風雨官軍乘シテ奮戰賊兵退キ
走ル官軍大砲ヲ以テ門ヲ破リ進ニ賊ノ銃炮兩
注官軍驚ル者數十官軍奮進シテ火ヲ山内
ノ伽藍ニ放ツ賊遂ニ保ツコト能ハス路ヲ分テ
脱走シ官軍之ヲ要撃シテ大ニ之ヲ破ル賊ノ伏

屍街市ニ充テ殺使來ニ定メ是月詔ニ德川氏
ノ封ヲ定メ駿遠奥羽ノ地ヲ併セテ七十石ヲ
賜フ六月賊ノ一軍箱根ニ據リ小田原藩私ニ之
ヲ援テ朝廷即チ諸軍ヲ遣ハシテ之ヲ討セシム
賊軍敗レ海路與羽ニ走ル朝廷小田原藩ヲ責ム
ルニ私カニ賊ヲ援クルヲ以テス小田原藩長
出レ所ヲ知ラヌ乃チ其封ヲ削リ罪ヲ許シ是
リ先キ官軍會津ヲ攻ント道ヲ分ツテ進ム薩州
長州加州尾州越前等ノ兵ハ越後口ヨリ薩長ノ
別軍及ヒ大垣等ノ兵ハ白川口陸ヨリ進ム德川

脱兵及び會津仙臺等ノ兵白川城ニ據ル官軍
攻テ之ヲ取ル既ニシテ賊軍大舉白川城ニ逼ル
官軍拒戦ヲテ克クス賊軍復白川城ニ據ル是時
ニ當リ越後口ノ賊軍勢頗ル盛ンナリ官軍信濃
川及ヒ稜嶺等ニ陣シ漸ク長岡城ニ逼ル賊軍
進ンテ稜嶺ヲ圍ハ官軍撃テ之ヲ破リ進テ賊ノ
諸砦ヲ取ル長岡ノ賊軍遂ニ城ヲ燒キ間道ヨリ
東ニ走ル官軍長岡ヲ取ル是ヨリ先キ白川ノ敗
報江戸ニ至リ朝廷因州備前柳川大村佐土原等
ノ兵ヲ遣ハシテ之ヲ援ハシム諸軍大舉復白川

城ヲ攻メテ之ヲ拔ク之ニ據ル遂ニ進ンテ會津
ニ向ハントス賊棚倉岩城平二城ヲ守ルヲ聞キ
即チ兵ヲ分テ二トシ棚倉ヲ攻テ之ヲ拔ク賊軍
銳ヲ悉シテ岩城平ニ集ル七月官軍岩城平ヲ攻
メント湯水小名濱二道ヨリ進ミ曉ヲ侵レテ平
城ニ逼ル賊軍之ヲ城外一里ニ拒ク薩州備前因
州柳川佐土原等ノ兵撃テ之ヲ走ラセ遂ニ之ヲ
圍ム賊軍嶮ニ據リ力拒ク兩軍ノ戰声雷ノ如ク
山岳為ニ動ク官軍進ニテ外郭ヲ奪フ既ニシテ
天暮ル官軍兵ヲ城外ニ引ク夜ニ及テ賊兵終ニ

大正十一年七月

支ヲ可カラサルヲ料リ城ヲ燒テ遁ル官軍城中
火起ルヲ見テ直ニ進ンテ城ニ上レハ賊ノ隻兵
ヲ見ズ平城ハ眞羽ニ入ルノ咽喉守ルニ便ニシ
テ攻ムルニ利アラズ是以テ賊カヲ極メテ拒キ
戰ヒ官軍死傷最モ多シト云是時ニ當リ越後口
ノ官軍長岡ニ據リ賊軍ト對壘シ砲声已ム時ナ
レ然レ勝敗未タ決マズ是以テ官軍直ニ會津ニ
向テ益ハス一夜賊兵官軍ノ備ヘサルヲ窺ヒ襲
撃テ大ニ官軍ヲ破ル長岡復賊ノ有トナル越
一日昧爽官軍大霧ニ乘レ潛カニ賊營ヲ窺フ賊

守カシモ

勝ニ紐テ備ヲ為リ官軍急ニ短兵ヲ以テ營ヲ
斫ル賊狼狽シテ走ル官兵北ケルヲ追々小銃ヲ
以テ狙撃ス賊軍大ニ乱ル官軍復長岡ヲ取ル是
ヨリ先キ會津征討ノ督將九條澤醜三軍兵數
十人ヲ率ニ眞羽ニ入り近傍ノ諸藩ヲ指揮ス諸
藩往々兩端ヲ持シ號令輒チ行ハレヌ獨リ秋田
津輕等ノ兵其指揮ニ從フ會津ノ國邑ニ退キ兵
備ヲ修ムルヤ庄内亦其藩ニ令シ會ノ應接ヲ為
ス是ヨリ先キ仙臺米澤兩藩討會ノ命ヲ蒙リ兵
ヲ出ス會藩書ヲ以テ哀ヲ兩藩ニ乞フ兩藩即チ

兵ヲ引キ南部以下十藩ト會議シ盟テ會藩ヲ有
シ兵ヲ戰メント連署シテ九條家ニ請フ參謀等
議シテ許サズ是ニ於テ仙臺以下ノ諸藩相與ニ
會藩ヲ後ケシコトヲ謀ル時ニ九條醍醐西家仙
臺ニアリ之ヲ聞テ去テ秋田ニ至ル澤家既ニ秋
田ニアリ即チ相會シ使ヲ馳マテ急ヲ江戸ニ報
ス朝廷大ニ驚キ仙臺以下諸藩主ノ官爵ヲ削リ
追討ノ令ヲ下ス仙臺藩同盟ノ賊軍秋田ニ逼リ
秋田孤立敗没且タニアリ既ニシテ薩州土州肥
州等ノ兵秋田ニ至ル官軍後大ニ振リ日ニ傍近

ヲ畧定シ白川口ノ官軍既ニ岩城平ヲ取リ勢
衆レテニ水松及ヒ三春ヲ陸奥ノ畧取ニ進ンテ仙
臺領ニ入ル既ニレテ越後口ノ賊軍亦敗ル官軍
勢ヲ得テ將ニ仙臺等ノ城下ニ逼ラントス是月
江戸ヲ攻メテ東京ト云八月官軍仙臺以下ノ諸
藩ヲ攻メ會津ヲ顧ミス參謀等相議シテ曰ク會
津ハ根本ナリ仙臺以下ハ枝葉ナリ根本ヲ拔ク
ニ如カス根本已ニ拔クキハ枝葉從テ枯ルノ
イ即チ諸藩ノ兵ヲ仙臺以下ニ分配シ遂ニ薩長
土大垣大村等ノ兵ヲ率ヒニ水松ヲ發シ方成嶺

松平カズモリ

日本書紀 卷之四

賊軍ノ不意ニ出ツ賊大ニ驚キ退テ城内ニ入ル
 賊軍ノ出テ四方ヲ守ル者之ヲ聞テ皆守ヲ棄テ
 若松城ニ走ル官軍日々ニ大砲ヲ城内ニ發シ賊
 勢ヲ挫キ以テ諸軍ノ至ルヲ俟ツ既ニシテ賊兵
 大舉城ヲ出テ官軍ヲ侵ス官軍退ク賊敢テ追ハ
 ス退ヒテ城ニ入ル幾クモ無フシテ諸道ノ官軍
 漸ク若松城下ニ集マル而レテ越後口ノ官軍會
 津川ニ至リ賊軍ノ障ニル所トナリ進ムコト能
 ハス若松官軍之ヲ聞テ後ニ會津川ノ賊兵

ラ撃ツ賊兵顧ミテ驚ク越後口ノ官軍又撃シテ
 大ニ賊兵ヲ破ル賊兵間道ヨリ遁テ若松城ニ入
 ル是ニ於テ越後口ノ官軍亦進テ若松城下ニ達
 ス官軍大ニ振テ城傍ニ天聲寺山アリ官軍之
 據ニ倚シテ城ヲ砲撃ス城兵頗ル苦シム賊兵相
 謀リ大舉夜ニ兼シテ官軍ヲ襲フ官軍地理ニ熟
 セス遂ニ崩潰シ死傷過當此ヨリ官軍石橋^上彈ヲ
 用ニ城中ニ連發ス城樓ヲ摧破シ城兵死スル者
 甚ク衆ニ參謀相議シテ日ヲ懸軍險地ニ入り時
 日ニ後サハ變或ハ生セン急ニ城ヲ凌キ勝敗ヲ

六才
俾料
上杉
大末

決スヘト即テ諸軍ノ向フ所ヲ定ム是時ニ當
ル米澤藤巳ニ官軍ニ降リ仙臺藩以下ノ兵糧振
ハサルヲ以テ城中始メテ降伏ノ議ヲ起ス數日
ニシテ賊將徒者ヲ官軍ニ遣ハシ降伏ノ情ヲ陳
テ參謀相議シ藩主父子ヲ軍門ニ降シ城及ヒ兵
器ニ救ムント命ヲ授ク日ヲ期シテ候者ヲ還ス
期ニ至リ藩主松平容保父子及ヒ重臣等城ヲ出
テ軍門ニ降リ城及ヒ兵器ヲ獻ス時ニ九月二十
三日トリ後五日ニ經テ仙臺南部庄内等亦皆降
伏シ城及ヒ兵器ヲ獻ス十月天皇東京ニ臨幸ス

中
御

有柳川宮東北鎮定スルヲ以テ錦旗節カヲ奉還
ス詔レテ其功勞ヲ賞ス十一月松平容保以下二
十三藩主ノ死一等ヲ減レ各藩ニ幽レ仙臺米澤
以下封三分ノ一ヲ削リ同族ヲレテ封ヲ嗣レハ
後特ニ陸奥ノ内三万石ヲ以テ容保ノ旗ニ賜ヒ
其祀ヲ存ス是ニ於テ天下ノ事畧定マル已ニレ
テ天皇西京ニ還幸シ是ヨリ先キ朝廷德川氏ノ
軍艦ヲ收ムルヤ德川氏ノ臣榎本鎌次郎等哀訴
歎願スルヲ以テ富士山艦以下四艘ヲ收メ特ニ
開陽以下ヲ賜フ此ヨリ榎本等品川海ニテリ既

年七

此津島守
秋田守

ニレテ軍艦ヲ率ヒテ東ニ走リ仙臺ニ至ル徳川
氏艦船ヲ以テ之ヲ追フ及ハス朝廷大ニ怒ル此
ニ至リテ東北諸藩尽ク降伏レ榎本等身ヲ容ル
ニテ所ナレ時ニ陸軍ノ諸脱兵亦會津ヲ退キ仙
臺ニ走リ遂ニ海軍ニ投ス相與ニ謀リ箱館ヲ取
テ之ニ據ラント即チ東ニテ箱館ニ向ツ箱館ノ
知事清水谷侍從五稜郭^{ゴロ}島^{シマ}ニ在リ賊艦ノ逼ルヲ
聞キ箱館ニ退ソク遂ニ青森^{アヲ}陸^{リク}ニ退ソキ急ヲ東
京ニ報ス已ニレテ賊ノ陸軍兵ヲ分テ箱館近傍
ヲ攻畧ス依竹津輕松前等ノ官軍所々ニ拒キ戰

守

ヲ互ニ勝敗アリテ賊勢益銳ク官軍遂ニ敗レ賊
軍五稜郭等ヲ取ル賊ノ海軍亦箱館ヲ取リ之ニ
據リ遂ニ松前城ニ逼ル官軍利アラス松前城亦
賊ノ有トナル賊勝ニ乘シ水陸並ニ進ミ海軍江
刺港^{ササノ}島ヲ取ル此時賊艦開陽大風濤ニ逢フ天摧
破ス是ニ由リテ賊軍氣頓^タ沮ム陸軍ハ小沙^コ子
島^{シマ}ノ嶽ヲ踰ヘ行官軍ヲ破リ勢ヒニ架レテ江刺
ニ至リ遂ニ箱倉石^{ハコ}之^ノ関^ノ館^ノノ皆^ハ並^ニ島^ニヲ取ル既ニ
ニテ退テ五稜郭ニ帰ル是歲夏費用ノ給ヒサル
ヲ以テ楮幣ヲ作り天下ニ布行ス秋^{アキ}而^{シテ}班^ハ牙^ハ瑞^シ典^ト

ガイ

二國ト條約ヲ結フ冬陸奥國ヲ分チ五國トス磐
城岩代陸前陸中陸奥出羽國ヲ分チ二國トス羽
前羽後

二十五百二十九年己巳二月箱根以下諸道ノ関ヲ
廢レ行旅ニ便ス三月天皇再々ト東京ニ幸ス是
ヨリ天皇永ク東京ニアリ是時ニ當リ朝廷箱館
ノ脱艦ヲ討セント海陸兵ヲ進ム諸藩ノ陸軍凡
ソ千五百人海軍申鐵陽春春日丁卯以下ノ諸艦
日ヲ分テ發レ既ニ南部ノ海港ニ達ス賊軍之ヲ
聞キ回天蟠龍諸艦ヲ率ヒテ箱館ヲ發レ曉ニ衆

シテ官艦ヲ襲フ戰數刺ニシテ賊艦返キ去ル官
軍諸艦青森ニ達ス四月官軍進シテ江刺ノ近海
ヲ過キ陸軍ヲ乙部邑渡ニ上ス陸軍直チニ上崖
山渡ノ要地ヲ保ツ賊兵之ヲ仰キ攻ム克スレテ
走ル官軍諸艦進シテ江刺ヲ取ル賊兵松前城ニ
走ル時ニ仙臺ノ脱兵五百人賊軍ニ投シ賊軍大
ニ振フ即チ大舉江刺ニ通ル官軍一戰之ヲ走ラ
セ海陸並ヒ進シテ松前城ニ逼ル賊兵出拒ク陸
軍輒チ進ムヲ得ス時ニ海軍已ニ松前城ニ逼リ
城内及ヒ砲臺ヲ撃ツ賊軍銃丸既ニ竭キ勢ヒ大

ニ衰ヲ官軍海陸並攻撃シ大ニ之ヲ破ル賊兵城ヲ棄テ福嶋^波ニ走ル官軍即チ松前城ヲ取ル而シテ賊軍福嶋及ヒ尻打木^{ウツキ}古内^{コウチ}ノ地ヲ保ツ此ヨリ官軍賊軍互ニ出テ互ニ退ソキ攻撃巴ムトキナク互ニ勝敗アリ而シテ海軍ハ遂ニ進ニテ箱館ヲ攻ム賊艦拒キ戦フ亦互ニ勝敗アリ五月海軍又箱館ニ逼ル賊亦拒戦フ官軍ノ彈丸賊艦蟠龍ノ蒸氣機關ヲ推シ賊軍氣餒カニ衰フ既ニシテ賊ノ千代田艦亦機關ヲ破壊ス賊兵別船ニ乘リ上陸ス此ニ於テ賊艦田天一艘ヲ餘ス官

軍諸艦田天ヲ圍ミ撃ツ亦蒸氣機關ヲ摧破シ運轉スル鉄ハス賊兵之ヲ淺洲ニ上ケ浮臺ト爲シ砲撃激烈官軍水理ヲ諳ニセサルヲ以テ窮撃セズニテ退ク此ニ於テ官軍海陸カヲ供セ大擧ニテ箱館ニ逼ル賊艦蟠龍修理已ニ成ル賊兵因テ浮臺田天艦等トカヲ供セ拒キ戦フ既ニシテ蟠龍ノ榴彈丸官艦長陽ノ硝庫ニ中ニ黒烟飛揚リ撃數十里ニ貫ヒ艦忽チ沈没ス官艦之ヲ望ミ直チニ蟠龍ニ逼リ大ニ之ヲ砲撃シ殆ント蟠龍ヲ碎ク賊兵即チ遁シテ松天埼^島ニ入ル官軍火ヲ

晴龍回天ニ放チ之ヲ焚ク此ニ於テ賊兵全ク海
軍ナシ此日陸軍箱館山ノ後ニ上リ賊ノ背ヲ擊
ツ此ニ至リ益勢ヒヲ得テ大ニ進ニテ賊軍ヲ擊
ツ賊軍大ニ敗レ殘兵五稜郭ニ走ル官軍遂ニ箱
館ヲ復ス進ニテ弁天埜及ヒ五稜郭ニ逼ル賊兵
大ニ懼ル官軍使ヲ遣ハシ賊將等ニ説クニ順逆
ヲ以テ論シニ降ヲレム賊兵往々降ヲ議スル
者アリ十八日賊將等衆ニ代リ刑ニ就カント皆
軍門ニ降ル後皆東京ニ押送ス此ニ於テ東陞悉
ク平ラシク六月丁卯戊辰以來ノ軍功ヲ賞ス是月

左右大臣大納言參謀ノ職ヲ置キ其地皆官名
ヲ改ム後又大政大臣ヲ置キ大納言ノ餘ハ
春藤長上肥前守表レテ封土ノ私有ハナク
亦從テ之ヲ請フ國廷災議ヲ詢ヒ此ニ至リ
許ス諸藩主ヲ以テ假リニ知藩事ニ先ツ八月
蝦夷地ヲ北海道ト改メ分割シテ十一國ト人
歲嶼斯大里射國ト條約ヲ結フ
二十五百三十一年辛卯四月東山而海二道ニ銀
ヲ置ク後ノ増シテ五鎮トス後チ又増シテ六鎮

ト云 一 大坂三 仙臺 七月藩 縣
テ縣ヲ置ク從前ノ知藩車悉ク之ヲ罷メ令參事
ヲ置ク後ヲ合併或ハ分割シテ七十二縣トス後
又減シテ六十而縣トス此ニ於テ封建ノ制始テ
一變ニ是月清國ト條約ヲ結フ十一月全權大使
ニ來歐諸國ノ遣ハス
二十五年百三十二年 申 五月天皇山陽南海西海諸
道ニ巡幸ス七月東京ニ還幸ス九月琉球國王尚
泰正使尚健副使尚有恒等ヲ遣ハシ八月大將
勅シテ藩王トシ華族ニ列ニ郵ヲ東京ニ賜フ是

時ニ當リ三條實美太政大臣トシ岩倉具視右大
臣タリ參議以下各其人ヲ得テ賢能輩出ニ朝綱
大ニ振ニ威德海外ニ及フ嗚呼盛哉

日本書紀卷之四 大尾



國勢沿革略論

神代遷焉不可測度。至神武運屬草昧。遵養時晦。久
 在西偏。一旦得時。奮然而起。靈蒸龍驤。東征七年。醜
 類伏誅。皇基爰定。其業丕矣。其烈偉矣。列聖相承。熙
 々熾々。無為而治。至崇神敬神。尊祖始置將軍。以征
 不庭。景行天縱。勇智輔以日本武尊。西討東伐。四海
 廓清。成務戢國。郡闕阡陌。大定民志。仲哀親征。熊襲
 中道而崩。皇后承之。戡定熱襲。餘威及海外。謚神功
 宜矣。應神朝。百濟王仁來。文教始興。承之以仁德之
 仁。躬行節儉。與民休息。立君為民。大哉帝之語。雄畧

日本書紀
猛厲嗜殺。然天資英明。晚年遷善勤政。是其所以為
雄畧。武烈之暴。繼體攻之。欽明之時。新羅跋扈。任那
百濟。仰我救援。出師海外。國家多事。加之佛法侵入。
蘇我氏三世。專橫無憚。遺毒餘燼。歷數朝而益熾。及
天智誅入鹿。國家復如磐石。建八省。改法制。郡縣天下。
國勢於是一變。矣。只惜不早定儲位。禍起骨肉。陵
上未訖。成王何在。雖叔為臣。雖姪為君。君臣之間。成
敗固難論。然天武之武。能承天智之智。偃武修文。勲
庸大集。至文武文物漸開。制度頗備。元明元正。女主
君臨。宵旰圖治。四海安寧。聖武信佛。土木妄作。仁恤

之政不及於。孝謙等道鏡。殆傾社稷。僅自消警。社
稷賴安。桓武英主。征伐蝦夷。曠俗警伏。遷都山城。永
定皇居。龍蟠虎踞。山河襟帶。真是帝王之極。至清和
尤心醉佛法。壯年去位。立幼冲季。政於藤原氏。基經
之行廢立。廢暗立明。廟議雖善。人臣專制之源實。在
於此。宇多良主。識藤氏難制。擢菅氏以抗之。然去位。
太速。菅氏真諦。初志不遂。醍醐中世之明主。延喜中
世之隆治。然信藤氏。敗菅氏。知寒夜脫衣。而不思賢
臣捧衣。於海隅十載之遺憾。惜哉。朱雀之朝。有天慶
之亂。乾綱不振。可知矣。自圓融至後冷泉。大抵皆暗

日本書紀
君庸主。藤氏益專權。視萬衆之君如孤豚。時則有安
陪時賴清原武衡之亂。源賴義父子前後討平之。自
此武臣邀功恃勢。相踵叛亂。政權之歸武門。既兆於
此。後三條以英明之資。躬總大政。壓抑藤氏。紀綱復
振。如大陽一出。百怪消滅。惜哉。承以白河之多欲。浚
民膏血。侈靡是極。院中決政。四十年所。惟薄不修。大
數倫理。保元之亂。胎胎於此。堀河鳥羽二帝之朝。嘉
謨善政。曾無所聞。崇德既去。位復位之念。熾々如火。
鳥羽晏駕。卽動于戈。師固無名。所以敗血播遷。南海
亦其可自取。後白河罷。藤原信賴。立速平。危之亂。化

平清盛。及遭其吞噬。清盛擁立。如主身為外祖。雖終
日職。公卿屏息。藤原成親密謀敗於前。源賴政義舉
不成於後。然而源賴朝者。敗亡之餘。流竄之徒。唯手
於蛇鳥。衆人神共憤。之機誅。鉞平氏。如友掌。雖以重
盛之忠孝。雖以知盛之智勇。遂不能救一族之覆滅。
賴朝繼殺義仲。復滅平氏。遂開幕府於鎌倉。以制大
下之政。武人為大君。朝廷特擁虛器而已。我國勢於
是又大變矣。賴朝貽謀不善。禍起蕭牆。其業遂衰。北
條氏以倍臣。執國命。承久舉兵。騷擾羣下。迫脅三上
皇。遷之海島。悖逆之甚。有不忍言者。廢立將軍。一如

威震天下。獨有毛利氏。雄張於山陽山陰。跨有十三州。信長乃西。其鋒中途遇弒。豐臣秀吉初起於人奴。為織田氏將校。遭變。故西與毛利氏和。東討光秀。一戰誅賊。兼織田氏之遺業。西伐東征。籠絡群雄。并吞天下。分土割地。封群雄。賜功臣。封建之形全成。嗚呼。其雄才大畧。可不謂不世出之大豪傑乎。然時既飽亂。人思太平。秀吉不知歸馬放牛之為良。誅尚欲逞其雄畧。出兵於海外。前後七年。兵連不解。中途而殺。其耀國威。下外國。則有焉。自為則無焉。是以振肉未冷。群雄各有自心之志。德川家康。國富兵強。亦有

名望。石南結黨。舉兵欲除家康。因原之役。一戰敗亡。推君家之天下。授之於人。而不自知也。大坂二役。豐臣氏忽諸不祀。悲哉。家康智略。蓋一世其成。霸示固宜矣。雖雜以詭謀權術。是亂世英雄之所。不免不足深咎也。秀吉一瞑。羣制天下。非家康誰居。不然。則天下之札柯。所底止。家康祛屣。武修文閣。二百餘年。雍虞之治。其功偉矣。兼之以秀忠之謹嚴。家光之英邁。基礎牢固。不可撼。撼天下諸侯。朝覲會同。唯恐後。何其盛也。及其李世。太平之久。上下慣恬。熙武倫弛。廢及外。舶來航海。內騷然。議論紛紜。幕政日非。諸侯不

復朝幕府。孤立於是。諸藩有志之士。並起唱王政。復古之議。幕府乃歸政權。天皇親裁萬機。廢門閥。舉賢能。鐵倉以來。六百八十年餘。天下復視王政之盛。而幕府遺臣。東北諸藩。抵抗朝命。嘯集與羽。天皇乃下勅。東伐。錦旗之所指。莫不風靡。東北悉定。敵境僻地。皆霽皇化。自此厥後。益盛外交。廢藩置縣。善政良法。逐日而舉。我國勢於是又大變矣。嗚呼。自今上下同心。誠能勵精圖治。孜孜不怠。則俟我皇國。輟歐駕。米耀光於海外。其豈在遠哉。



王復古不國天圖

日本海

黃海

朝鮮

高麗

新羅

百濟

三國

地方

官制

沿革

地理

物產

風俗

語言

文字

宗教

藝術

科學

教育

法律

政治

經濟

軍事

外交

內政

社會

家庭

個人

職業

勞務

分配

消費

儲蓄

投資

利潤

稅收

債務

保險

信託

遺囑

遺產

繼承

贈與

買賣

租賃

抵押

擔保

代理

代表

委託

授權

許可

批准

核准

核辦

核奪

核議

核示

核覆

核辦

核奪

核議

核示

核覆

核辦

核奪

核議

核示

核覆

T/26
Kage

明治九年二月八日御届
三月三日 齣刻

齣刻人

大坂府中氏

柳原喜兵衛

第大區廿一區
北又本郡四丁目十四番地

同

同

淺井古兵衛

同區東物四丁目三十三番地

大坂府中氏

前川善兵衛

第大區廿一區
東又本郡四丁目十五番地

齣刻人

社会科